
クマさんと鬼ごっこ

有北真那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クマさんと鬼ごっこ

【Nコード】

N1432M

【作者名】

有北真那

【あらすじ】

ある日始まった事件。次々襲われる少年達。その事件の裏に動く闇と立ち向かう刑事達。それぞれの思惑を胸に繰り広げられる戦い。終焉のその時、戦士達を待つ未来とは

！？

1 匹目 初動 - 戦禍の火種 - (前書き)

この物語は「街のクマさん」を参考に書かれているため、多数の類似点、共通点が存在することを予めご了承下さい。

1 匹目 初動 - 戦禍の火種 -

> i 1 0 8 8 2 — 1 3 1 3 <

絵：夢見月空音

作者：有北真那

神奈川県・某所

「…続いてのニュースです。神奈川県内の公立高校に通う熊田拓也さん18歳が、5日前から行方が分からず連絡も取れないということとで昨日27日に両親から失踪届けが出されました。これについて警察は誘拐の可能性も視野に入れて搜索する模様です」

ブラウン管の中で綺麗なアナウンサーが淡々と話している。

「最近こんなニュースばかりね」

台所で人参を切っているお母さんが呟く。

「そうなの？」

僕はゲームを一時中断して耳を傾ける。

画面の中では主人公が熊に襲われる直前だった。

「今月に入って8人目よ。それも全部神奈川県で。優君も気をつけてね」

僕は小口優太小学2年生。皆と変わらない普通の子供。でもいつか超能力が使えるようになるって信じてます。

お母さんは梢約30歳。優しいけど怒ると怖い。リビングの壁にへこんでる部分があるけど、訳あってお母さんが殴った場所です。

お父さんは僕が生まれてすぐに蒸発したらしい。

「優君、そろそろ寝なさい」

お母さんが優しい口調で言った。今のうちに言うことを聞いておかないと後が怖い。

「はい」

僕は主人公が熊にやられる前に電源を切った。

果たしてあの人参は何に使われるのだろうか？

アメリカ・遺伝子研究所

「KEEP OFF」と書かれた紙が貼られた扉を慎重に開ける男がいた。

「What is it？」

男は中にいた女に声をかける。

「This is Japanese man」

女は白衣を身にまとい、黒く長い髪を後ろに束ねている。

男は後ろから見える女の首筋にしばし目を奪われた。

「Man...? Isn't he bear？」

男は鼻で笑いながら聞いた。

「..... He is...」

女は男に振り向いた。

「He is those who suit」

女は眼鏡を胸ポケットに入れ実験室を後にした。その顔は何かを達成した満足感で溢れていたが、瞳は冷たいままだった。

男は実験体に近づいた。190？を越えるガタイの男は意識がなのまま表情は苦痛で歪んでいた。鼻や腕には無数の管が刺さっている。

薄暗い実験室をよく見ると壁や床、機材は血まみれだ。奥に目を凝らすと肉片が転がっていた。

男は頬に汗が伝うのを感じた。表情を固めたまま男は実験室を後にする。

神奈川県・川崎市

「また明日ー！」

「ばいばーい！」

日が暮れ始めた頃、僕らはそれぞれに別れを言って家路につく。

そうして家について食事、テレビ、風呂、ゲーム、就寝……翌日の朝日を拝み、学校に行く。

何ら変わらない日常がこれからも続くと思っていた。

(タツタツタツ)

僕は言い知れぬ不安を抱えて駆け足で家に急いだ。

「その僕……」

不意に物影から声がした。僕は足を止めて声がする方に意識を向ける。

「僕は小学生？」

低い小さい声だ。

「そ、そっだよ」

僕は一歩後退りながら答える。

「名前は何か？」

「……駆」

「駆君か……美味しそうだな」

僕は耳を疑った。”美味しい”という言葉を食べ物以外に向けて発せられるのを初めて聞いたからだ。

だが次の瞬間、僕の思考は完全に停止した。

声の主は姿を現すと僕の服を引き裂いた。190?の巨体を前に、僕は悲鳴すらあげられなかった。

「グルウウウ……」

欲求を満たした男は獣のような声を出しながら闇に落ちていく街に溶けていった。

僕は薄れゆく意識の中、恐怖と痛み、そして変わらぬ日常が音を立てて崩れ落ちたのを覚えた。

小口家

「…続いてのニュースです。昨日14日の18時頃、神奈川県川崎市に住む花井駆君9歳が何者かに襲われる事件がありました。駆君は命に別状はなかったものの深いショックから未だ会話ができない状態のようです。小学生を狙った事件は今月に入ってから多発していて、都内で16人、神奈川12人、山形8人、京都11人、鹿児島9人と国内全域で起きていてその数は増える一方です」

「小学生のお子さんを持つ保護者の方は一層の対策をお願いします」横のアナウンサーが続けて言い、CMに入った。

「やだ、怖いわね」

お母さんが今日は大根を切りながら呟く。

「別に大丈夫だよ」

僕は他人事のように言った。

「被害に遭った子だって皆そう思ったはずよ…。優君だって狙われるかもしれないんだから夜は遅くなっちゃダメよ、絶対に」

お母さんは切った大根をタップに詰めた。どうやら漬物を作っているらしい。

「分かってるって」

ゲームの画面では主人公が熊に食べられた。それを期に僕は電源を切ってゲーム機を放り投げた。

「僕は…大丈夫だよ」

自分に言い聞かせるように繰り返し呟いた。

熊田の失踪届け提出から3日後

アメリカ・遺伝子研究所

（ガラガラガラ）

実験体に乗せたストレッチャーは別の部屋に運ばれている。

「Is he…bear?」

以前とは別の男が女に聞いた。

「He is Japanese man・I received the same question from」Renom」

女は実験体を見つめながら答える。

「How will this man become it in the future?」

男も実験体を見つめた。

「……………」

女は不適な笑顔を浮かべて何かを呟いた。

男はその言葉の全ては聞き取れなかったが、唯一聞き取れた言葉を続けて呟いた。

「……………Clone?」

ストレッチャーはとある一室に入った。この部屋の扉にも「KEEP OUT」と書かれた紙が張ってある。

「Dr.」Yamazaki」

女は中の男に声をかけた。

「Hi, Riley」

Yamazakiは明るく女に手を振った。もう一方の手には注射器がある。

Rileyともう1人の男はストレッチャーを手早く奥に移動させた。

部屋の中は液体が入った大小の試験管や、何台ものパソコンが並んでいる。

真ん中から奥半分は厚い鏡で仕切られている。そつち側には大の男が余裕で入れるくらい巨大なガラス製容器が4つあった。

「Dr. Riley, How does he become it
?」

「Dr.」Jane」……」

Rileyは右手に隠し持っていたメスでJaneの腹を刺した。

Janeは悲鳴を上げながら床に倒れた。刺された箇所を必死に押さえるが溢れる血は止まらない。

「Tim」

Yamazakiは特に驚いた様子を見せずに助手を呼んだ。

Timは他の助手数名と共に部屋に入ってきてJaneを担いでどこかに行った。

助手の1人が床に広がった血痕を拭き取る。

助手達はすぐに別の入口から鏡の向こう側に直接入り、Janeを容器の1つに入れた。

よく見ると他の3つには既に先客がいた。

助手達は慌てることなく、計画されていたかのように素早く行動している。

「アトハマカセタワ」

Rileyは片言の日本語でYamazakiに声をかけ、部屋を後にした。

「任せてくれ」

Yamazakiは閉まった扉に向けて呟く。その表情はさつきまでの陽気な男とは別人だった。

2 匹目 会議 - 集いし戦士達 -

6月20日

警視庁4階・会議室

重たい空気が流れる一室、口を開く者はいない。ただ沈黙を続ける他なかった。

(ガチャ)

私は扉を開き、唯一の空席に腰を下ろす。思っていた通り、苦しい程の雰囲気と白い目が向けられた。

「それではこれより」「全国児童襲撃事件対策本部」会議を行います」
私は意を決して口を開いた。

「いったいどういうことか、始めから説明していただくのか」

1人が私に向かって抗議した。彼に続いて野次が飛ぶ。

「……分かりました、簡潔に説明します。まず、全国で小学生が襲われる事件が多発しているのはご存知かと思います」

私は皆の顔を見渡した。

「そこで我々警視庁が全ての事件を比べたところ一致する点が非常に多いことから、このような対策本部を開かせて頂きました」

「ではなぜ6人しかない？ 全国から集めたんじゃないのか？」

「全国と言っても事件が起きてるのは限られた場所です。丁度いい機会ですので皆さんの紹介も含めて私から説明しましょう。まずは東京から、今回の指揮を取らせて頂く私「田沼和也」警視正と「四名本武弘」警視、被害件数は28。神奈川から「西川里奈」警視長、被害件数は27。山形から「高羽賢多」警視、被害件数は23。京都から「林田明太」警視正、被害件数は24。鹿児島から「山崎司」警視長、被害件数は27です」

6人は互いに顔を見合せた。

「…… 1ついいですか？」

高羽が手を挙げた。

「何ですか？」

私はなるべく優しい口調で対応する。

「対策本部の設置やこの面々が集まる理由は分かりましたが……
その、階級からいっただら普通…… 指揮を取るのは西川警視長か山崎
警視長なのでは……」

高羽の言葉は語尾が弱まっていく。それもそのはず、普通はこんなこと触れてはいけない話題だ。

「警視總監が私を指揮監に指名したからです」

”警視總監” という一言で場の空気はさらに重くなった。

「私からもいいですか？」

今度は西川が手を挙げた。

「先ほど一致する点が非常に多いと仰られましたが、詳しく伺えますか？」

西川は私の返事を待たずに一気に話し終えた。

「もちろんです。こちらをご覧になって下さい」

私は四名本に目で合図を送った。

彼は部屋の明かりを落としてプロジェクターを起動させた。

「まず犯行時間ですが、午後5時から午後9時までの4時間の間に
ほぼ全ての犯行が行われています。場所は人気のない住宅街や公園、
海辺等です。被害者の年齢は6歳から12歳までの小学生。被害者
が会話できないことから詳しい犯行内容は分かりませんが、性的暴
行が殆どと思われます。そして……」

私は言葉を濁した。

「そして？」

西川は続きを促した。

「被害者は全員…… 男の子なんです」

私の言葉に部屋は一瞬騒ついた。

「では、犯人は女性グループということに？」

林田が口を開く。

「そうとも限りませんよ」

山崎が立ち上がった。彼は部屋の扉を開けた。すると外から1人の女性が入ってきた。

「先日まで仕事でアメリカにいたのですが、向こうの遺伝子研究所で出会った「Riley Reagan」教授です」

山崎は彼女の肩に手を乗せた。セクハラだ。

「ハジメマシテ」

Rileyはお辞儀しながら片言の日本語で挨拶した。

「それで、犯人が女性じゃないという根拠は？」

私は話の続きが気になった。

「彼女のお父さんが人工衛星の管理の仕事をしていることから、貴重な資料を頂いたんですよ」

Rileyは手に持っていた大きな茶封筒から写真のコピーを数枚取り出し、山崎に渡した。

「これは鹿児島での犯人とされます」

山崎は1人ひとりに写真のコピーを渡した。

「こ、これは！？」

高羽が驚きの声を上げた。

「これは……確かな情報なんですか？」

西川も驚きを隠しきれなかったようだ。

「もちろん、確かです」

山崎は席に戻った。

Rileyは山崎の後方の壁に寄りかかった。

「つまり……犯人は…男、ですか……」

私は写真を見ながら言った。写真に写る男は耳が獣のように尖り、瞳に正気はなく目は吊り上がり、坊主頭には血管が浮き上がっている。190?を超える筋肉質の身体はもはや人間離れしている。

重い空気はさらに悪化したようだった。さあ、どうやって次の話を切り出そうか……。

「それで田沼指揮監、私達はこれからどうすればいいのかしら？」
再び西川が話を進める。噂通り、この人はそうとうできるタイプだ。じゃなきゃ警視長になんてなれやしないが。

「会議終了後、皆さん方にはすぐにそれぞれの署に戻って頂きます。そうしたらまずは手の空いている警官を2人1組でパトロールさせて下さい。時間や場所は先程のものを参考にして決めて下さい。そして一番大切なこと！」

私は思わず身を乗り出した。

「犯人と思われる人物を発見しても、声をかけず応援を要請して尾行して下さい！」

「どうしてですか？」

高羽がまた手を挙げた。この人はどうやって警視にまでなれたのだろうか……。

「尾行してグループまとめて逮捕できたら一件落着でしょう？ それにいくら銃を持っていてもこんな熊みたいなのが相手じゃ……」

西川は写真の男を横目に鼻で笑った。

「田沼警視正、頼みなんですが……」

山崎が腕を組ながら言う。

「何でしょうか？」

私は落ち着きを取り戻していた。

「Riley教授をこちらの本部に残していいかな？ 彼女はパソコンの腕にも長けている。犯人の身元確認など、きつと事件解決の力になってくれるだろう」

山崎はいたって真面目な顔で言葉を続けた。

「……分かりました、いいでしょう」

私はRileyに向かって笑顔を見せた。

彼女も笑顔で答えた。

「それでは、会議は終了でいいですか？」

林田が席を立とうとした。

「事件の情報は全て本部に連絡して下さい、どんな些細なことも全

てです。それでは解散とします」

私の言葉で四名本とRiley以外の刑事が部屋を後にした。

「熊……………か…」

私は西川の言葉を思い出した。写真の男はたしかに熊そのかもしれない。

「クマさんと鬼ごっこ……………ってところですかね」

四名本は笑いながら言葉を残し、Rileyを別室に案内するため
に部屋を出た。

彼女は私に一礼して彼についていった。

「面倒な事件になりそうだ……………」

私は椅子の背もたれに寄りかかり深い溜息をした。

3 匹目 遭遇 - 崩れゆく日々 -

6月21日15時

神奈川県警

昨日、西川から会議のことやパトロールの話をされた。そんなわけの仕事が早めに終わった俺は煙草を吹かして待っているというわけだ。

犯行が起きてるのは17時かららしいが、余裕を持って16時からやれと言われた。あと1時間だが、果たしてアイツは来るのだろうか……。

「……おい」

遠くから声がした。俺は正面に目を凝らす。

「やっと来たか！」

俺は3本目の煙草を携帯灰皿で処理して男が駆けてくるのを待った。

「久しぶりだな、河浦！」

彼は河浦竜一階級は俺と同じ巡查長だ。

「それはこっちのセリフだ！ いつの間に帰ってきてたんだ？」

河浦はすぐに息を整えた。相変わらず体力だけはあるみたいだ。

「2年くらい前かな。神奈川には3ヶ月前からだ」

「……家族とは会ったのか？」

河浦は神妙な面持ちで一番聞いてほしくないことを口にした。

「いや……。それより今日の帰りに一杯どうだ！？」

俺はムリに明るく振る舞う。そんな気持ちを察したのか、河浦はそれ以上このことについては聞いてこなかった。

「お2人さん、そろそろ時間だよ」

後ろから声がしたので振り返ると、いたのは井ノ部博貴と井川拳次の通称「井井コンビ」（良いコンビ）だ。

偶然にも同期にして同じ階級の4人が揃った。

「久々だな、小口！」

井川は俺の肩を2度叩いてパトカーに向かった。

井ノ部も笑顔でそれに続く。

「俺達も行こうぜ、聖夜！」

河浦は俺の腕を引っ張って駐車場に連れていった。

17時半

陽が沈みかけているからか、空が紫色だ。こんな気味の悪い日には何かが起こる気がしてならない。そして悪い予感がよく当たるものだ……。

「……つつつてもパトロールで犯人に出くわすなんて普通ねーよな」

「」

俺はクーラーの威力を調節しながら言葉を宙に投げた。

「警官がそんなこと言うなって。何もやらないよりかはマシだろ」

河浦は低速で車を走らせる。だがハンドルを右に切った時……。

「ガガ……こちら井………至急……8 - 26地点………求む……！」

突如無線が喋り出した。無線の向こうでは銃声と獣の叫び声が聞こえる。

「今の声は………井川……！」

俺の眠気は一気に覚めた。

「聖夜！ 8 - 26……！」

河浦はギアを入れ替えた。

「任せろ……！」

俺はカーナビのリモコンを握った。

10分前

「話によると犯人つてのは熊みたいな男らしいぞ」

井ノ部は安全運転を心掛ける。チキンだからな。

「でもそれ鹿児島県の犯人だろ？　ってかそんな奴がいたら一目で分かるよな」

井川は爪を弄りながら言葉のキャッチボールを楽しんだ。

「ちょうどあんな感じじゃないか？」

井ノ部は前方の男を左手で指差した。

190？の筋肉質な体格に前屈みになった上半身、血管が浮き上がった坊主頭からは湯気が昇る。

「……えっ!？」

井川は目が点になった。まさしく熊そのものにしか見えなかったからだ。

「グウウウ……!!」

前方の熊は確かな足取りでパトカーに向かってきている。

井ノ部はブレーキを踏切り、腰の拳銃を取り出した。

「おい、発砲許可はまだ……!」

「動くな!!」

俺の忠告を無視し、井ノ部はドアを開けそこに体を隠しつつ銃口を熊に向けていた。

「俺達の命を優先する!!　お前は早く応援を……!!」

突如熊は咆哮をあげ、両腕を掲げてこっちに走ってきた。

「くそがあ!!」

井ノ部は無許可のまま発砲した。

熊は見た目とは裏腹にキレのある動きで銃弾をかわした。

「こちら井井コンビ!　至急8 - 26地点に応援を求む!!」

井川の声はパトカー全車と西川のもとに走った。

（ドグシャッ！！）

熊の振り下ろした右腕が車のバンパーを破壊した。これで足は断たれた。

俺達は車を挟んで熊と対峙している。

「くそつ、化け物め！！」

井ノ部は銃弾を詰め替えている。

俺はリボルバーに目をやる。弾はまだ4発残っていた。

「グアアアオオオーー！！」

熊はさらに大きな雄叫びを上げる。

俺達は耳を塞ぐしかなかった。早く、早く応援よ……！！

（ファンファンファン）

パトカーのサイレンが聞こえてきた。だがまだ遠くだ。

「なんとか耐えるぞ……！！？」

井ノ部が銃口を再び熊に向けると、熊はパトカーを乗り越えて襲ってきた。

「なっ……ぐああーー！！」

刹那、俺の目の前で井ノ部の左腕が宙を舞った。

悲鳴をあげてその場に崩れる井ノ部。

俺は熊に向かって引き金を引き続けた。4発の内、1発が熊の左腕の二の腕を貫いた。

「グウウウ……！！」

熊は傷口を押さえながら俺達から距離を取った。

サイレンの音はだいぶ近付いてきている。

「井ノ部！？ 大丈夫か井ノ部！？」

俺は自分の銃を捨て、井ノ部の銃を拾い銃口を熊に向けた。地面には井ノ部の血が広がっていく。

（キキーーー！！）

「井川！！ 井ノ部……！！？」

俺達の後ろから1台のパトカーが現れ、中から小口が出てきた。
井ノ部の様子を見て動揺を隠せなかった。

「河浦、救急車を！！」

井川はまだ車内にいた河浦に声を飛ばした。

「尾行どころじゃない！ 殺す気で行くぞ！！」

小口は馴れた手つきで拳銃を構えた。

2人から銃口を向けられた熊はこっちを向いたまま後退っていく。

（ドカアアーーン！！）

その時、西に2？のどこにある工場が爆発した。

俺達がそっちに気を取られた瞬間、熊は夕闇に消えた。逃げられてしまった。

「しっかりしろ井ノ部！！」

救急車に運び込まれる彼に向かって俺と小口は何度も声を掛けた。

「聖夜、井川」

救急車を見送る俺達に河浦が話し掛けた。

「熊の血液を採取した。身元が分かるはずだ」

河浦は血が染み付いたガーゼをひらつかせて見せた。

「何でお前はそんなに冷静でいらんだよ！？」

俺は河浦の胸ぐらを掴んだ。

小口が咄嗟に止めに入る。

「……言いたいことはそれだけか？」

河浦は俺の手を払い除けて言う。

「なにっ！？」

俺は拳を強く握った。

「井ノ部が望んでることは同情してもらうことか！？ 違うだろ！
熊を討ち取ること、それが……それだけが俺達刑事にできること
だろうが！！」

河浦の言葉に俺も小口も言い返すことができなかった。

俺達3人は1台のパトカーに乗り込み無言で帰路についた。

どつやら当分の間、飲みには行けないようだ。

餌図鑑 Account - 1

年齢は6月21日時点のもの

クマダタクヤ
熊田拓也

男 18歳 高校3年

- ・ 5月22日から失踪中
- ・ 本作品の重要人物

オグチユウタ
小口優太

男 7歳 小学2年

- ・ どこにでもいる子供
- ・ 内心は熊の脅威に怯えている
- ・ 神奈川県在住

オグチコズエ
小口梢

女 約30歳

- ・ 優太の母親
- ・ 優太が生まれてすぐに蒸発した父親の分まで1人で家を守ってきた

・怒ると怖い

ハナイカケル
花井 駆

男 9歳 小学4年

- ・14日に被害に遭った少年
- ・未だに会話ができない状態

Dr・Yamazaki

男 ??歳

- ・遺伝子学の学者
- ・好きな物は試験管と注射器

Dr・Riley

女 ??歳

- ・遺伝子学の学者
- ・片言だが日本語が話せる

Dr・Jane

男 ？？歳

・ Dr・Rillyに刺され、実験体にされる

Dr・Tim

男 ？？歳

・ Dr・Yamazakiの助手の1人

タヌマカスヤ
田沼和也

男 42歳

・ 警視庁勤務の警視正

・ 全国児童襲撃事件対策本部指揮監

ヨナモトタケヒロ
四名本武弘

男 40歳

・ 警視庁勤務の警視

・ 田沼の頼れる右腕

ニシカワリナ
西川里奈

女 45歳

- ・ 神奈川県警勤務の警視長
- ・ 仕事に真面目で基本はS
- ・ しかし時折見せる女性らしさが中年男を虜にする

タカバケンタ
高羽賢多
男 39歳

- ・ 山形県警勤務の警視
- ・ 実力は一級品だが……

ハヤシダアキタ
林田明太
男 41歳

- ・ 京都府警勤務の警視正
- ・ 常に重い雰囲気を持っているが本当は優しい

ヤマサキツカサ
山崎司
男 48歳

- ・ 鹿児島県警勤務の警視長
- ・ 謎の多い人物

R i l l y R e a g a n

女 ? ? 歳

・ 山崎に連れられてアメリカから来た遺伝子学の教授

カワウラリュウイチ
河 浦 竜 一

男 3 4 歳

・ 神奈川県警勤務の巡査長

・ 時間にルーズ

・ いつでも明るい性格が時々鬱陶しい

・ 昔から弄られキャラというのは秘密事項

イノベヒロタカ
井 ノ 部 博 貴

男 3 4 歳

・ 神奈川県警勤務の巡査長

・ 河浦と同期

・ ここぞという時以外は基本チキン

イガワケンジ
井 川 拳 次

男 3 5 歳

- ・ 神奈川県警勤務の巡查長

- ・ 河浦、井ノ部と同期

- ・ 井ノ部とは配属以来ずっとコンビを組んでいる

- ・ 通称、井井コンビ（良いコンビ）

オグチセイヤ

小口聖夜

男 34歳

- ・ 神奈川県警勤務の巡查長

- ・ 河浦達と同期だが、しばらく日本にいなかったような口振りをしていた

- ・ 家族と疎遠

4 四目 混沌 - 淡い想い出 -

6月22日9時

警視庁・応接室

私は階段を急いで下る。廊下を駆け、角を曲がり、経理部の若い子とぶつかりそうになりながらとにかく急いだ。

（ガチャッ）

「お待ちせしました！」

息も絶え絶えに応接室に走り込んだ。中ではあの方がお茶をすすっている。

「おはようございます、田沼警視正」

彼女は私を笑顔で迎え入れた。

「西川警視長：わざわざ本庁までお越し頂かなくても……」

一昨年に会議で集まったばかりだというのに……まさか私に会いに！？ という淡い妄想は簡単に掻き消された。

「実は昨日、パトロール中の部下4人が犯人と接触し、内1人が左腕切断の重傷を負いました」

彼女は湯飲みを机に置いた。視線は窓の外……いや、もっと遠くに置かれていた。

「そ、その方は無事で？」

私は机を挟んで彼女の正面に腰を降ろした。

「命はなんとか……。今日ここへ来たのには1つ調べて欲しいことがあるんです」

彼女は私の方に向き直した。

「これは戦闘の結果採取できた犯人の血液です。身元の確認をお願いしたいのです」

紅く染まったガーゼが密封された袋の中に入っている。

彼女はそれを私に差し出した。

「なぜ科捜研でなく私に直接？」

それを受け取りながら質問した。

「ここにはRiley教授がいるのでしょうか？ 科捜研に頼むより早く済むと思いましたから」

そう言うのと彼女は腰を上げた。

「それともう一つ、部下からの情報では犯人の容姿外見は鹿児島の人と瓜二つみたいよ。それと最初から性的暴行をされるような感じじゃなかったらしいわ」

そう言っただけで彼女は部屋を後にした。まったく話が早い。

私は四名本に証拠品を渡した。どうやら彼はRileyと上手いっっているらしい。

……羨ましい限りだ。

10時

(コンコン)

扉を2度ノックする。

中から返事が聞こえて私は部屋に入った。

「ドクター」

私は田沼から預かった証拠品を渡しながら身元の特定を頼んだ。

「Ok! … Well …… please call me Riley」

彼女は少し顔を赤らめて言った。

私はこれでも人並みに英語ができると自負しているので、彼女の言いたいことが分かった。

「Riley」

年甲斐にもなく私は恥ずかしさを感じた。

「Shall we eat dinner tonight?」
言い終わった後に私は後悔した。自分でも無意識の内に彼女を夕食に誘っていた。

こんな綺麗で若い子（はつきりとまで年齢は分からない）が私みたいなオジサンとは……。

「Really!？」

彼女は意外な反応を示した。

「Yes, please!」

彼女は飛び跳ねて喜んでいる。誘っておいて何だが、私が一番驚いている。

彼女は鼻歌を歌いながら顕微鏡やらを準備しだした。

私は部屋を後にし、心ここにあらずで仕事に戻った。

20時

警視庁前

仕事を終えた私は庁舎の玄関に急いだ。そこには既にRileyがいた。

女性を待たせてしまうとは男として情けない。

「Riley!」

私は彼女に声をかけた。彼女は笑顔で私を迎えてくれた。

ああ、この笑顔があれば私はこれからも生きていけそうだ。

「Let's go!」

彼女は私の手を取って、もう一方の手をグーにして斜め上に突き出した。

私は純粹無垢な彼女にどんどん惹かれていった。

今夜Rileyを連れて入ったのはイタリアンの店。

今まで1人でしか来たことがないので誰かに見られることもないだろう。

「いらつしゃいませ」

店員が笑顔で挨拶し、窓際の席に案内された。

私達はパスタとピザ、赤ワインを頼みしばしの団欒を楽しんだ。

次第にアルコールが回り私達のテンションは上がっていった。

私は会計をカードで済まし店を出た。

彼女は自分の分は自分で払うと言い続けたが、強引にそれを阻止した。

酔いのせいなのか私達の距離（心も立ち位置も）は初めよりも近くなった。

気分の静まらない私達は近くの公園に寄りベンチに座った。

周りからするとカップルに見えるのだろうか。だとすればこの雰
囲気でこの場所は……。

いや、警官がこんなところで……！

だが……。

「I'm very very happy！」

彼女はベンチに座りながらも一向にテンションが下がらない。

私は彼女の話を見ながら笑顔で聞き続けた。まさかこんなに元気満々な子
とは思わなかった。

徐々に彼女は落ち着きを取り戻し、その代わりに目は眠気を帯び、
欠伸が増えてきた。

「Sleepy」

彼女の頭が私の肩に乗った。まるで騒ぎ疲れた子供のようだ。

私は彼女の肩に右手を回し、体を引き寄せた。

次の瞬間、私の口は彼女のそれによって塞がられた。1秒がとて
もとても長く感じる。

彼女の唇が私から離れると互いに目も合わせられなかったが、互

いに頬が赤くなっていることを感じた。

「そ、そろそろ帰ろうか！」

腰を上げて2、3歩前に出た私は慌てすぎて日本語で喋っていた。

「Thank you... and... good-bye」

彼女は私の口と鼻をハンカチで塞いだ。

とつさのことで薬品の臭いを勢いよく吸い込んでしまった。

「ぐっ……Riley、どうして……？」

私の視界は歪み、地面に仰向けに崩れた。

彼女が私の左腕に何かを注射したのを最後に、私は現実世界を去った。

「楽しませてちょうだい、四名本警視……」

Rileyは日本語を綺麗に発音してみせた。彼女は四名本の体を持ち上げ、ベンチに座らせた。

注射された付近の血管が浮き上がってきている。

（ザワザワザワ）

木の葉が風に揺れて泣いている。その音は男のこれからの不幸を予感しているのか、それとも……。

5 匹目 豹変 - 消えゆく灯火 -

6月23日6時

警視庁

この日警視庁に、正確には全警察署に戦慄が走った。

四名本が意識不明のまま都内の病院に運ばれたのだった。

「すぐに現場の状況を報告しろ！！ 所轄しょかつは昨晚現場付近で四名本を見た人がいないか聞き込みだ！！」

田沼の声が飛ぶ。

「現場つてどこですか！？」

所轄の刑事「青柴」が質問する。

「ここより北西に1？、4 - 81地点だ！！ 私は病院に向かう！！」

田沼は後は任せたと言わんばかりに会議室を飛び出した。

こんなに着きのない会議は久々だ、と1人の刑事が漏らす。

「行きましよう、「和木」さん」

先程の所轄の刑事が横に座っていたベテランの先輩刑事の腕を引っ張って出ていった。

病院前

私はここで刑事の勘を感じとり、足が止まった。

刑事2人（井ノ部巡查長もこっちに転院していた）が入院しているにも関わらず、警備が誰もいない。

あまりにも静かすぎる。

「あれは……！？」

病棟を眺めていると血がついた窓を何枚か発見した。

私は拳銃を抜き弾を確認し、両手でしっかりと握り正面玄関から侵入した。

院内

私は自分の目を疑った。

受付の女性2人は胸を引き裂かれている。脈を確認したが、遅かった。

私は物影に身を潜め、本庁に連絡を入れた。

「グオオオ……」

携帯を閉じた時、上の階から獣の雄叫びが響いた。

「いったい何が起きているんだ……！？」

院内をよく見渡してみると壁に獣の爪でできたような傷跡や銃弾の跡をいくつも見つけた。

階段の方に目をやると下半身を露にした男性（医師）が俯せに倒れていた。腹の辺りから血が広がっている。

「まるでゲームの世界だな」

額に溢れだす汗を拭い、私は静かに階段を登った。

院内の床や壁は常に紅く染まっている。

（ファンファンファン）

パトカーのサイレンが近づく。

私は2階への階段を登りきり、通路の様子を伺っている。

2人の刑事が入院しているのは3階だが1階の様子からして、私は何が起きてもおかしくない状況だと判断していた。

「ガア……！」

獣の声がさつきより近い。おそらくこの階にいる。

私は自分の警備を割り、1人で来たことを後悔していた。

（ファンファンファン！！）

そんな事を考えている間に仲間のパトカーが到着したようだ。
私は一度1階に戻ることにした。

パトカー内

「何で神奈川県警の自分達が？」

俺は西川に異義を唱えた。

「本庁の刑事は出払っているらしいの。そこで病院に近い私達が呼ばれたの」

どうやったらこのメンバーがパトカーに乗るのだろう？

運転席に河浦、後ろに西川警視長と井川、助手席に俺。

井川は緊張のあまり顔色が悪い。

「到着しました」

河浦はパトカーを停めて誰にも気づかれないほど小さな溜息をついた。

「行くぞ」

西川は真つ先に車を降りて玄関に向かう。

俺達はすぐに後を追った。

「今回、発砲を許可する。責任は私がとる」

彼女は血のついた窓を見るなりそう言った。その声に震えはない。

院内

「……西川警視長」

玄関をくぐると田沼が柱に身を潜めていた。

「田沼警視正、これは一体……？」

俺達は動揺を表に出しはしなかったが、目を丸くしていた。

「私にもサッパリです」

彼は下半身露の男性をチラ見しながら続けて言う。

「ただ……犯人はおそらく、熊でしょう」

田沼は上を指差している。

「四名本警視と井ノ部が……！！」

河浦は銃をしっかりと握り直す。

「急ぎましょう」

西川は顎で俺達に”行け”と指示した。

俺達は小さく頷き、井川を先頭にして俺が続き、河浦は一番後ろに回った。

2階

「熊はこの階に？」

俺は後ろの田沼に尋ねた。

彼は低い声で返事をし、階段を登りきった左側の廊下に目をやった。

奥からは呻き声がする。

「生け捕りですか、それとも……？」

井川が言葉を濁らす。

「殺して構わん……ですよね？」

西川は田沼の横に立って言った。

「自分達の命を優先しよう。……熊を殺しても構わない」

彼は鋭い目付きになり銃を構えた。

俺達は足音を消して廊下を進む。

「グオオオ……！！」

右側の病室から咆哮がした。

井川は素早く手鏡を利用して中を見る。

「熊が……息耐えた患者を、その……犯しています」

井川は手鏡を引っ込めて深呼吸をして言葉を続けた。

「その熊なんですが……左腕がないんです」

「それがどうし……!!」

俺は言葉の途中で理解した。

「そこにいる熊の正体は……井ノ部です……!!」

井川は声を押し殺して叫んだ。

俺達は俯いて歯を食い縛って考え込んだ。が、彼を助け出す答えは出なかった。

「井ノ部博貴巡査長はもういない。そこにいるのは……大量殺人犯だ」

西川は銃を構えて俺達の顔を見回る。

「了解……!!」

返事をしたのは井川だった。銃を構え、もう一度深呼吸をし、病室に突入する。

「動くな、井ノ部!!」

井川は銃口を熊と化した男の頭に向ける。

「グルウウ!!」

熊を動きを止めず、視線だけをこっちに向けた。

井川の腕は微かに震えている。

「止めるんだ井ノ部!!」

俺も声を上げた。

そこで熊は患者を放り投げ、体をこっちに向けた。既に衣類は身につけていなかった。

「グワオオオ……!!」

熊は叫び声とともに井川に襲いかかる。

井川は引き金を引くことができなかった。

代わりに俺が放った銃弾は熊の左足を貫いた。

「グウウ……」

熊はその場に倒れた。

「死ぬ気か、井川!？」

俺は井川を見つめる。

彼の顔は哀しみに曇っていた。が、何かを決心したように緊張が切れた。

「お前も苦しいんだよな、井ノ部？」

井川は銃口を逸らしてゆっくりと熊のもとに歩く。

熊は左足を押さえながら立ち上がった。

「俺には分かるぜ……何年間コンビ組んでたと思ってんだ？」

「ダメだ井川!！」

俺が駆け寄ろうとした時……。

「ガアアア……!！」

熊は井川の首を両手で絞め、首に噛み付いた。

鮮血が遠く飛び散る。

「お前が……死ぬ時は……俺も一緒だ……そうだろ？」

井川は熊を抱き締めるよう背中 hands を回し銃口の向きを逆にして、熊と自分の心臓が重なる位置にあてがい……。

(パアアアン!！)

親指で引き金を引いた。

渴いた銃声が世界に響き渡り、1人と1匹は重なったまま床に倒れた。

「そんな……」

俺は銃を床に落とし、膝をついた。頬を悲しみが流れる。

西川は携帯を開いた。

「……西川よ。……ええ、死亡者多数、生存者はおそらく0。それと、井川巡査長、井ノ部巡査長の死亡を確認。……分かったわ」
彼女が携帯を閉じ、口を開こうとした時……。

「小口、河浦、しっかりしろ! 四名本を捜すぞ!」

田沼が2人の肩を揺する。

「……井川と、井ノ部は……どうすれば……?」

俺の声は震えていた。

「生きている可能性がある方を優先する。行くぞ」

俺は田沼に腕を引っ張られ、病室……いや、現場を後にした。

3階

俺達4人の顔は暗い。さっきまで先頭を歩いていた戦友の姿はもうないんだ。

「ちよつといいすか？」

最後尾の河浦が言った。

「耳を澄ましてみてください」

俺達は言われた通り”音”に神経を集中した。
すると……。

「グオオー………」

熊の声がした。この階からだ。

「熊がもう1匹!？」

銃を握り締める俺の手は汗ばんでいる。脳裏にはさっきの光景が焼き付いている。

「もしかしたら………」

「四名本……だろっな」

西川の言葉の続きを田沼が奪った。

「ガアアア……!!!」

突如、天井を突き破って熊が降ってきた。田沼の真上だ。

「危ない!!」

俺はとっさに田沼を突き飛ばした。

熊の爪は俺の右肘をかすめ、床がさらに紅くなる。

「四名本……!!!」

田沼は熊の顔を確認した。その直後……。

（パアアーン!!）

熊のこめかみを銃弾が貫通した。西川警視長だった。

「大丈夫、小口？」

西川は銃をホルスターに戻した。

「……………」

俺は返事をできなかった。

「どうした、聖夜？」

河浦が俺の目の前で手を振る。

「井ノ部は熊に襲われて入院して、自分も熊になった。……………じゃあ、俺も、熊になるのか……………」

俺はその場に座りこんだ。

（ピーポーピーポー！）

タイミングよく救急車が到着したようだ。

俺達はすぐに階段を下った。俺は救急車に乗せられ、どこかに運ばれた。

「西川警視長、小口はこの後どうなるんですか？」

河浦が不安そうに尋ねる。

「手当てをした後、監禁状態にして監視する。彼が熊になることは想像したくないが……………もしそうになったら何時間で発症するのか、血液等に変化があるのか、調べさせてもらうわ」

西川は腕を組ながら言った。彼女も悲しみを隠しきれてはいなかった。

「話は後だ。すぐにこの病院を完全に塞ぐ！」
声を上げるのは田沼。

「もし熊に襲われた人が第2の熊になるなら、この病院からさらに熊が現れるかもしれない！」

彼は周りの刑事にすぐに準備に取り掛かるように指示した。

「河浦、あなはしばらく自宅待機しなさい」

西川が肩を叩く。

「ど、どうしてですか！？」

「一度気持ちを整理してきなさい。迷いがあれば、次に熊になるのはあなたよ」

6 匹目 行進 - 深まる闇 -

6月30日

警視庁4階・会議室

「これより第2回全国児童襲撃事件対策本部会議を始めます」
病院での事件から1週間後、私は再び会議を開いた。
今はもう、私の横に四名本はいない。

「どうやら被害者は児童だけじゃ済まなくなってきましたね」
林田が低い声で言う。

「四名本警視のことは残念に思います」
高羽が私の方を向きながら言った。

「だが四名本君だけではない。鹿児島でも同じように刑事が襲われた」

山崎が言う。

「京都もです」

続けて林田。

「山形も」

さらに高羽も。

「どうやら熊の性質が変わってきたようですね」

西川がまとめる。

「まだ感染方法は不明ですが、熊に襲われた人が新たに熊になる可能性が出てきました」

私は四名本と井ノ部の顔を思い出した。

「1週間前の病院での事件で熊によって負傷した小口巡査長ですが、2日後に発症し熊になりました。今は麻酔で眠らせていますが、それも時間の問題ですね」

西川の言葉に私は顔を曇らせた。

彼女は続けて言った。

「今のところ熊になった人を治す手段はありません」

「どうするんですか、指揮監？」

不安そうな顔の高羽が問いたです。

「熊の捕獲。ただし治す方法が分かっていない今、刑事の命を優先するしかない」

「射殺も仕方ない、と？」

険しい顔つきの林田。

「これ以上熊を増やすわけにはいきません」

苦渋の選択だった。反対することは簡単だが、それよりもいい案を出せる者はいなかった。

「それと山崎警視長……」

私は彼の方を向いた。

「何かね？」

「四名本が襲われた日を最後に、Riley教授が消息を絶ちました」

「……分かった、私も行方を捜そう」

「今回の事件の重要参考人として、お願いします」

私は鋭い目付きで彼を見た。

同日・会議前

警視庁5階・対策本部会議前・大講堂

「事件同日、四名本警視が女性とイタリアンレストランで食事していたのを目撃した人がいました。さらに、犯行現場の公園でも同じ女性とベンチに座っているとこを目撃されています」

所轄の青柴はいつも汚い緑色のコートを着ている。

「その女性の身元は？」

私は彼に尋ねた。その女が四名本を熊にした張本人かもしれない。

「それがですねその女性……あのー、鹿児島県警の山崎警視長が連れて来たっていう、教授さんなんですよ」

横に座っていた和木が立ち上がって言った。

騒めきが静まらない。

「静かに！……それで、彼女の行方は？」

私は場を静め、続けた。

「四名本警視が襲われた日を最後に行方不明です」

青柴はそう言うと言静かに椅子に戻った。

「遺伝子学教授の Riley Reaganを今回の事件の重要参考人とする！ 全力で行方を追え！！」

私は興奮を抑えきれず、立ち上がって怒鳴った。

7月1日

1年の半分が終わった。

だからといって何かあるわけじゃない。時間は常に進む。止まることも戻ることも決して起こりえない。

だから”今”なんて瞬間は本当は存在しないんじゃないかと思う。

「今」と言った”時”はもう過去になる。でも”今”があるから”

今”のボクはここにある。

”今”を見ることも、聞くことも、言うこともできないけど、それでも”今”は確かに存在した。

ボクが、ボクたちがここにいることが、それを証明する。

……。

……！

何かが聞こえる…？

……！！

私を呼ぶのは誰だ！？

「田沼警視正！！」

「………っ！？」

いつの間にか眠っていたようだ。椅子に腰かけたまま背もたれに身体を預け夢の世界にいた。

何か悲しい夢を見ていた気がする。何だ？ 何を見ていた？

…思い出せない。

「大丈夫ですか、警視正？」

目の前の男が心配そうに顔を覗きこんでくる。

見たことない顔。いや、どこかで見たのか……、今は何も思い出せない。

「ああ、大丈夫だ……。君は誰かね？」

私は何度か瞬きをして視界を鮮明にさせた。

「鹿児島県警から来ました「大杉周作」警視です。殉職なされた四名本警視の代わりに警視正の手伝いをするように山崎警視長から言われたのですが……」

大杉と名乗った男は少し不安気になっている。鹿児島から来たわりになまりが皆無だ。

「山崎警視長から……」

私は思考停止の脳を必死に働かせて記憶を辿る。

「………そうか、君か」

思い出した。昨日の会議の終わりにそんな話をした。まさかこんなに早く来るとは思わなかったが。

「はい、よろしく願います！」

大杉は敬礼と共に返事をした。

仕事中は辛気臭い四名本とは違うタイプのようなのだが、なかなか感じのいい男だ。

同日

太陽は地平線に沈み、空には朧月。月光の届かない山奥に私はいる。

ツタが絡みつきひび割れが目立つ廃墟のような2階建てビル。作戦の第3段階に移るためにこの隠れ家に来た。

第1段階は日本の警察本庁に潜入すること。これは簡単だった。

第2段階は今回の事件の対策本部指揮監の補佐役の暗殺。

日本の警察のデータはよく分かっている。階級はそれほど高くないが頭の切れた男がいる。数々の難事件を解決したとき、常に補佐官として裏で動き回っていた男。それが四名本武弘警視だった。案外簡単に殺れたが、変わりに私は警察に追われる身になってしまった。

そしてこれから行う第3段階……。

「Dr. Yamazaki」

私はビルに足を踏み入れた。

灯りは月だけだ。そもそも蛍光灯は全て割れている。

「待っていたよ、Riley。作戦は上手く進んでいるようだな」

暗がりの奥から20代後半くらいの声が聞こえてくる。

「でなければ私はここにいませんよ」

私は目が慣れるまで大人しくすることにした。

「はっはっは、それもそうだ。だが重要なのはこれからだぞ」

男の声に緊張感はあるほどない。

「分かっています。それで次は何を？」

「ふふ……熊達に警視庁でも潰してもらおうか」

笑い混じりの言葉は冗談なのか、それとも……。

7 四目 謀反 - 開かれる扉 -

7月4日

警視庁2階・小会議室

「警視正――！！」

大杉が慌てた様子でやってきた。

「四名本警視が襲われた事件の同日、同時刻、別の場所でRileyの目撃情報が次々と上がっています――！！」

大杉は両手に資料を握っている。目撃情報が書いてあるのだろうが、グシャグシャになっている。

「場所はどこだ！？」

私はこの近辺の地図を広げた。

大杉がペンで印をつけた位置はあまりにもバラバラすぎた。

「これは一体……すぐにRileyの身元を調べ尽くせ――！！」

今は怒鳴るほかない。

「既に調査済みだよ」

扉の前にいるのは林田だ。

「林田警視正、なぜここに！？」

私は彼を招き入れた。

「彼女が気になって調べさせてもらった。なかなか興味深いものだったよ」

林田はクリップで止められた数枚の資料を机に放り投げた。

大杉は素早く手に取り読み上げた。

「Riley Reagan、本名は「天王寺アイル」。日本人の父親とイギリス人の母親のハーフらしいが、血液の遺伝子型からみて生みの親ではないらしいです。出生地不明。兄弟姉妹不明。15歳の時に単身でアメリカに渡り遺伝子学を学び、現在は27歳……」

「アメリカでの……12年間は詳しく分かりませんでしたか？」

私は大杉が資料を机に戻したのを見てから言った。

「その間、彼女はDr. Yamazakiという教授と共にずっと地下の研究所にこもっていたらしい。そして驚いたことに鹿児島県警の山崎警視長だが、その時からアメリカへの出張回数が以上な増加を見せている」

「じゃあ山崎警視長とRileyが手を組んでいると!？」

大杉は”信じられない”という顔をして呆然としている。

「Rileyをここに残してほしいと言ったのも山崎警視長だったな……」

私は腕を組んで思い出す。

「どうします? 山崎警視長の身柄を抑えますか?」

林田は私を見ている。

「……いや、泳がせよう。彼の動きを監視します。もしかしたら奴らをまとめて逮捕できるかもしれない」

私は林田を見つめ返した。

「じゃあ自分が……!」

大杉が手を挙げようとしたが、後ろから女が割って入ってきた。

「私に行かせてくださいな」

彼女は「牟田晴美」警部。スタイル、ルックス共に中の中だが、その笑顔と優しい敬語が部下から絶大な人望を集めている。

「確かにたった3日で大杉を戻すのは怪しまれるが……」

私は女性を行かせることに少し不安を感じている、差別だが。

「彼女でいいんじゃないですか? 女性の方が向こうも気を緩められるかもしれない」

林田は牟田の笑顔を横目に言った。

「……分かりました。ですがまだ山崎警視長が犯人グループの1人に決まったわけじゃありません。くれぐれも無理な行動をして怪しまれることのないように」

私は彼女の目を見て真剣に言った。

彼女は明るい声で返事、敬礼をして部屋を後にした。
明日には鹿児島に着いてもらう。その前に山崎、西川、高場に電話の1つでも入れておこう。

7月5日

ある日

森の中

熊さんに

出会った

「もしもし？」

大杉は着信を取った。

「……警視正、山崎警視長からです」

大杉は通話中のままの自分の携帯を私に差し出した。

「……田沼です」

なるべく平静を装おわなければ。

「山崎だ、例の事件について興味深いことがある」

「いったい何でしょうか？」

「実は7月1日から事件数が減っていき、昨日はついに0になった。だが我々が熊を捕まえたわけじゃない。しかもそれまで極わずかながらあった熊の目撃情報すらなくなった」

「それは妙ですね……」

果たしてその内容は本当に真実なのか……。

「とにかく私はこれからそっちに向かう」

山崎は自分の言いたいことだけ言うと電話を切ってしまった。

私は携帯を大杉に返した。

「すぐに牟田警部に連絡を！ こっちに帰るように伝えてくれ」

私は誰でもかまわずに声を投げた。

1人の部下が返事をして受話器を手にする。

「警視正、林田警視正から電話です」

階級が同じだと少しややこしい。

私は回線を繋げて電話に出た。

……警視正……高場警視から……。

……警視正……。

この日、鹿児島、京都、山形の警察署から電話が入り事件数が0になったことと、熊の目撃情報がなくなったことを伝えられた。

しかも対策本部に呼んでいない、事件数が少なかったところからも同じ電話がきた。

何かが起きている。そしてその何かがきつとすぐに分かる。嵐の前の静けさとはきつとこの事だろう。

私は言い知れぬ不安と恐怖に襲われた。

この職についてから現実的な考え方をするようになった。いくら綺麗事を並べても不可能や避けられない、変えようのない事実が訪れる。

近々警察の人間が死ぬ。それは私かもしれないし、友人や仲間、名前も知らないような部下かもしれない。

それでも逃げるわけにはいかない。我々警察が戦わなければ市民はどうなる。

私は……俺達は守るために戦う！

8 匹目 回想 - 背負われた罪 -

同日

神奈川県内・某所

「たしかこころ辺のはずなんだけどな……」

俺は一戸建てが連なる閑静な住宅街を右往左往している、ある表札を探して。

「……………あつた」

俺は小さい溜息をつきながらその表札の字を指でなぞった。

……………小口。

12日前に豹変した戦友の顔が鮮明に脳裏に焼き付いている。

俺は首を数回横に降ることでの記憶をしまい込み、小口家のインターホンを押した。

(ピンポン)

返事はすぐにきた。

「どちら様でしょう？」

高く透き通る声。7年前と何も変わっていない。

「神奈川県警の河浦と申します」

最後に会ったのはだいぶ前だ。もう俺のことは覚えてないだろう
と思い、他人として挨拶した。

「河浦……さん？ ……………河浦竜一さん!？」

彼女の記憶はすぐによみがえったようだ。

「お久しぶりです、梢さん」

「す、すぐに行きます!」

彼女は本当にすぐに出てきた。喜びと不安が入り混じった顔を
して。

私は小さなお辞儀をして、促されるまま家の中に入った。

「あなたが来たってことは、あの人に何かあったんですね……」
彼女は2つの湯呑みにお茶を注ぎ1つを私に差出した。
家の中はそれほど変わっていない。しいていうなら子供の物が増えたことぐらいだ。

聖夜はきつとまだ自分の子供の顔を見ていないんだろう。

「自分が聖夜と再会したのはつい最近です。日本には2年前に戻ってきたらしいんですが、誰にも連絡よこさないから……」

「やっぱり7年前の事件をまだ気にしてたのね……」

彼女は窓の外に目をやった。

太陽は空高く昇り、少し暑いぐらいの陽射しが部屋を侵食する。
彼女の寂しげな横顔は全く変わっていない。そう、あの日から……

…。

7年前

「今日も良い天気だなー」

助手席にはいつも通り聖夜がだらしなく座っている。たまには運転を変わる気にはならないものか。

「こんな日にも事件が起きるってーのが面倒くさい」

後ろに座っている男が口を開く。

彼は「伊東友喜」巡査。5人目の同期だ。

たまたま同じ交番に配属された俺達5人はすぐに打ち解けた。

上司は「交番に新人5人なんて何を考えて……」とよく小言を言っていたが、賑やかなのが好きな人だから内心では喜んでいたらしい。
この日は俺と聖夜と友喜がパトロールをしていた。井ノ部と井川は残って雑務。

「お、おい……」

驚いた様子の聖夜が呼び掛ける。

「どした？」

ちょうど信号に捕まったので聖夜が指差す方を見た。

指名手配犯でも見つけたならこのまま運転を続けてやってもいいと思った。

「あの人……めっちゃ可愛いんですけど！」

明日はこいつに運転をさせよう、何が何でも！

「梢ちゃんにバラすぞー」

友喜がすかさず釘を刺す。その顔が満面の笑みなのは腹黒だからだ。

「じ、冗談に決まってるだろ！」

そんな平和な時間を過ごしていた。警察なんてのは暇なのが一番いいことだ。

でもそうはいかないのがこの世界だ。

「た、助けてくれー！」

慌てた様子の男がパトカーに駆け寄ってきた。

「どうしましたか！？」

聖夜がすぐに対応する。

さっきまでの怠けっぷりは欠片もない。この切り替えの早さだけは尊敬する。

「そこの銀行に強盗が！」

男が指差す建物は異様な雰囲気包まれている。その一帯だけ人も寄り付いていない。

「竜一、応援を呼べ！ 友喜、行くぞ！」

2人はすぐに走って行ってしまった。

この時なぜたった2人で行かせてしまったのか、俺はずっと後悔することになる。

「さーて、中の様子は……？」

俺はガラス越しに中を伺った。

犯人らしき人物が2人、銃を持っている。客は10人弱。カウンターの女性がバックに札束を入れている。

「どうする、聖夜？」

友喜が俺の顔を見てくる。

応援を待っていたら奴らは逃げてしまう。拳銃を持った人間を街に放ってしまうのは危険だ。

「俺達で何とかするしかないだろ」

俺は腰の銃を抜いた。もちろん発泡許可は下りていない。だが学生時代から反省文を書いている俺は始末書には慣れている。

友喜は不安そうな顔のまま俺の後に続いた。

「俺は左の男をやる、友喜は右の奴を頼む」

「……な、なあ、やっぱり応援を待ったほうがいいんじゃないか？」
友喜が俺の肩に手をかける。

「何言ってるんだ、大丈夫だよ。一発ぶん殴って銃を奪えば終わりだろ」

「そ、そうだけど……」

「ビビってんなって。ほら、行くぞ……」

俺は心の底では分かっていた。友喜の言うように応援を待ったほうがいい。

でもこの時の俺はその若さゆえに何でもできると思い込んでいた。

銀行内

「さっさと金を詰める！！」

強盗犯の男は銃を向けている。受付の女性は従うしかなかった。

（ガーーー）

入口の自動ドアが開いた。

「誰だ!？」

もう1人の男が銃を構えて振り返る。しかしそこには誰もいなかった。

「そ、そのドアは誤作動が多いんです、すみません!」

銀行の係の男がとつさに言った。その男はドアが開く直前に警官の影を確認していた。

「ちっ……ちゃんと直しとけ!」

2人の強盗犯は金を詰める女性に向き直した。

(どすっ)

(ぼふっ)

(ゴッ)

「ぐはっ!？」

俺達は男が向き直した瞬間、静かに、でも素早く中に侵入し犯人を取り押さえた。

(がちやつ)

「ふー」

俺は手錠をかけて溜息をした。それでもけっこう緊張していたんだ。

「やったな、友喜……」

(パァン!)

俺の目の前で友喜は仰向けに倒れた。

犯人には手錠がされている。じゃあ誰が?

「そっちの警官も動くなよ」

犯人はもう1人いた。人質の振りをして紛れていたのだ。

「友喜、しっかりしろ!」

だが反応はなかった。

俺は両手を挙げながらゆっくり立ち上がった。

「計画が台無しだぜ」

男はこっちに近付いてきた。殺される、そう覚悟した時……。

(パァァン!)

再び銃声が響いた。

人質となった人達はその音に再度身を縮める。

(どさっ)

力なく床に伏したのは……俺じゃなく犯人だった。

「いったい誰が……！」

引き金を引いたのは友喜だった。

最後の力を振り絞って放たれた銃弾は犯人の心臓を貫いた。

「友喜！」

俺は目に涙を浮かべながら駆け寄った。

銃を構えていた友喜の腕は重力に負けて床に落ちた。

「ひゅー……ひゅー……」

上手く呼吸ができていない。胸に目をやると肺のあたりが紅く染まっている。

「聖夜、友喜！」

銃声を聞いた竜一が息を切らして入ってきた。

「竜一、救急車を！」

「わ、分かった！」

一目で状況を理解した竜一は素早く携帯を取り出した。

……………。

「7年前、自分が聖夜を見たのはあの日が最後でした。2人の死者を出した事件の責任を全て1人で背負い、あいつは……」

「それで、あの人は今どこに？」

「……先月から児童を襲う事件が多発しているのはご存知ですよね？」

「え、ええ」

彼女は小さく頷いた。

「自分達もこの事件の捜査に加わっていたのですが……井ノ部と井

川が既に命を落とし、聖夜は謎のウイルスに感染したと見られていて、犯人と同じ症状に……」

「同じ症状とは？」

「……外見が熊のようになり、男を襲い出します」

「そんな……」

「今は麻酔で落ち着かせていますが、治療法が見付かっていません……」

……。

しばらく沈黙が続いた。

「河浦さん、伝えに来てくれてありがとうございます」

彼女は涙を堪えて言った。目が少し赤くなっている。

「もし……もしそんな状態の聖夜にでも会いたいと言ってくれるなら、7日にここに」

俺は病院の地図が書かれた紙を渡した。

「上には了承を得ています。無理して来て頂かなくても構いませんので」

俺は立ち上がり一礼して家を後にした。

帰り道、考えた。本当は黙っていたほうが良かったんじゃないか。7年も会っていなかった夫にやっと会えると思ったら、その人は犯人のように狂い、拘束されている。

「くそっ……」

やり場のない怒りにかられ、俺は塀を殴った。

9 匹目 七夕 - 運ばれる闇 -

7月6日

警視庁

「け、警視正……!!」

大杉が大慌てで走ってきた。

「た、たまた大変です……!」

梅雨のじめじめ感もあり、彼の汗は異常な量だった。

「そんなに慌ててどうした?」

その焦り様に私は少し恐怖を感じた。

「鹿児島発、東京行きの方が……飛行中黒煙を上げながら高度を下げ、海面に衝突し爆破しました! これがその時の乗客リストです!」

皆がいつせいにデスクに集まった。

リストの中にはマークで目立たされた名前がある。

「……山崎司、牟田晴美」

私は読み上げた。

沈黙と重い空気がこの場を支配した。

「ただの事故とは思えない、すぐに調べてくれ」

私は椅子に戻りながら言った。

部下達は小さな返事をして重い足取りで持ち場に戻った。

同日

「乾杯、ドクター」

私は赤ワインを一口飲んだ。

「これが最後の晩餐にならないことを祈るばかりだな」

彼も同じものを飲み、いつものように明るく言った。

「それにしてもどうやってこんな客船のチケットを？」

タイタニックを彷彿させるかのような豪華客船に、凶悪事件の犯人の私達がどうして乗れたのだろう？

「何、簡単さ。チケットを持っていて人が熊に襲われ、そのチケットをくすねただけだよ」

彼は普段の白衣とは真逆の黒いスーツを着こなしている。

「ずいぶん酷いことするわね、私達」

赤いドレスに身を包み、髪は束ねず自然と後ろに流している。

「今日は僕らだけじゃなくて、皆集まっているよ」

彼は私の後ろに目をやった。振り返ると男女が1人ずついた。

「アイル姉さん！」

黄色いドレスを着た女の方が私に抱きついてきた。

「来てたのね「フィリス」」

私は妹の頭を撫でた。

「それと、山崎警視長」

私は嫌らしい笑みを浮かべて男を見た。

「おいおい、その呼び方は止めてくれよ」

山崎はタキシードを着ている。

「4人が揃うのは久々ね」

私達はもう一度乾杯した。

「司は大丈夫なの？ こんなとこにいて」

私は尋ねた。

「ああ、私は飛行機が墜落して死んだことになっているからね」

「あらあら、ずいぶんとお仲間を悲しませるのね」

「そんなことより、熊達はちゃんと向かっているの？」

フィリスが心配そうな顔をしている。

「大丈夫だよ。だって熊達もこの船に乗っているんだからね」

Yamazakiはワインを飲み干してから言った。

だが待て、今何と？

「乗ってるの……？ この船に！？」

フィリスは目が点になっている。私もこれは初耳で驚いた。

「そろそろ起きるかもしれないから、避難しとこっ」

司がワイングラスを回しながら歩きだした。私達はその後に着いていく。

船の上で避難ってどこにだろう……？

「これは……！？」

ただの廊下の壁だと思っていたところが実は部屋の扉だった。ドクターは知っていたようだ、私達3人は目を丸くしている。

「……何か声が聞こえる」

妹が耳元で手を広げる。彼女の特異能力で、常人には聞き取れない遠くの音や小さな音が聞こえるのだ。

「きっと熊達のパーティーが始まったんだろう」

司の口元が緩む。よくこんな性格で刑事になれたものだ。

「ところで、熊達は性欲を満たしたら次に何をするか、知っているかい？」

Yamazakiは椅子に腰かけ、足を組んだ。

ワイングラスはテーブルに静かに置かれた。

「いいえ、知らないわ」

私と妹は同時に答えた。

「次は食欲を満たすんだよ。……フッフ」

船は確実に東京に向かって進んでいる。月明かりの下、静かな海を。

この先の悲劇を知ってか知らずか、波の音は規則正しく奏でられていた。

7月7日2時

日付を越え、真夜中というのに寝付けない私はソファに座り水を一口飲んだ。

熊事件は解決しないどころか刑事の命が失われていく。どうにかならないものか……。

「私はお前の分まで生きられているか？」

テレビの横に置かれた写真に向かって呟いた。

「警視總監の「中矢温志」は……娘のことが忘れられ……寝よう」

私は「美帆」に別れを告げ、今度こそ寝るぞと意気込んだ。

その結果、寝つくまで20分はかかってしまった。

同日4時

ふと目が覚めてしまった。

空の漆黒は力を弱め、目覚めの時を待っていた。

「5月22日にあの子がいなくなって今日が7月7日……七夕なのに、あなたはどこにいるの？」

ベランダの笹の葉には短冊が吊されている。

”拓哉が早く帰ってきますように”

「あなたも拓哉がいなくなったこと、知ってるわよね……温志さん」

同日6時

雀の鳴き声で目が覚めた。

私はリビングで河浦さんに渡された地図に目をやり、もう一度考
えてから覚悟を決めた。

「会いに行くわ、聖夜」

私は優太を起こしに寝室に向かった。

同日7時

雲1つない青空がどこまでも広がる。いつもと同じ1日が、いつ
もと同じように始まり、いつもと同じように過去になっていく。誰
もがそれを疑わない。

この世に永遠がないことを知りながらそれを認めようとはしない。
始まりがあるものに終わりは必ずくるのに……。

「西に飛べば夜は来ない」

そう思って翼を広げたあの鳥も、60億のワタシ達も、この星に
さえも、終わりはきてしまうんだ。

大切なことは終わりを延ばすことじゃない。終わりを迎えたとき、
どう思えるか。どう思えるように過ごすかだ。

「死んだ後はどうなるのか」

そんなこと考えるのは早過ぎる。まずは”人間”を生きなければ
いけない。

終わりはくる。その事には変わりはない。ワタシ達が生まれたその
瞬間から、終わりは始まっている。

9 匹目 七夕 - 運ばれる闇 - (後書き)

参考

UVERworld / コロナ

RADWIMPS / ヒキコモリロリン

from・ルキ

餌図鑑 Account - 2 (前書き)

作者「あー、疲れた！ 小説書くつてのはなかなか大変なのね（・・；）」

ルキはいつもの執筆場所（といっても携帯でやつてるかゴロゴロしてるだけ）から立ち上がり、うんっと背伸びしたが立ち眩みでふらついた。

作者「あーダメだ、フラフラだ。」

再び執筆場所に戻り（寝っ転がるだけ）携帯を開いた。

作者「キャラもごちゃごちゃしてきたことだし、もう一回餌図鑑を書こうかな」

そんなわけで完成しました再版盤「餌図鑑 Account - 2」

どうぞー

餌図鑑 Account - 2

年齢は7月7日時点のもの

オグチセイヤ
小口聖夜

男 34歳

- ・ 神奈川県警勤務の巡査長
- ・ 7年前の事件の責任を背負い海外に飛ばされていた
- ・ 現在は熊になっているが麻酔と拘束で命を繋がれている

オグチコスエ
小口梢

女 約30歳

- ・ 神奈川県在住
- ・ 聖夜がいない間1人で息子を育てていた

オグチユウタ
小口優太

男 7歳 小学2年

- ・ 聖夜と梢の子供
- ・ 父親のことは蒸発したとしか知らない

カワウラリュウイチ
河浦竜一

男 34歳

- ・ 神奈川県警勤務の巡査長
- ・ 聖夜と同期
- ・ 熊の捜査で仲間がやられていく怒りに襲われている

イノベヒロタカ
井ノ部博貴

男 享年34歳

- ・ 神奈川県警勤務だった巡査長
- ・ 聖夜と同期
- ・ 熊になって病院で暴れているところを井川に射たれて殉職した

イガワケンジ
井川拳次

男 享年35歳

- ・ 神奈川県警勤務だった巡査長
- ・ 聖夜と同期
- ・ 井ノ部と心中を図って命を落とした

イトウユウキ
伊東友喜

男 享年27歳

- ・ 神奈川県内の交番勤務だった巡査
- ・ 7年前の銀行強盗事件で命を落とした

タヌマカズヤ
田沼和也

男 42歳

- ・警視庁勤務の警視正
- ・熊事件の指揮監
- ・最近お疲れのご様子

ヨナモトタケヒロ
四名本武弘

男 享年40歳

- ・警視庁勤務だった警視
- ・熊になって病院で暴れているところを西川に射たれて殉職した
- ・実は優秀な刑事だった

オオスキシュウサク
大杉周作

男 37歳

- ・警視庁に派遣されている鹿児島県警の警視
- ・明るい性格
- ・着信音は”森のくまさん”

ムタハルミ
牟田晴美

女 享年38歳

- ・警視庁勤務だった警部

アオシバ
青柴

男 38歳

- ・警視庁の所轄の巡查長

和木 ワキ

男 59歳

- ・警視庁の所轄の警部補

西川里奈 ニシカワリナ

女 45歳

- ・神奈川県警勤務の警視長
- ・消えていく部下を助けられず怒りに奮えるがその姿は誰にも見せないでいる

高羽賢太 タカハケンタ

男 39歳

- ・山形県警勤務の警視
- ・現場でのみ力を発揮する

林田明太 ハヤシダアキタ

男 41歳

- ・京都府警勤務の警視正
- ・真面目で怖い印象だが内面は優しさで溢れている

ヤマサキツカサ

山崎司

男 48歳

- ・ 鹿児島県警勤務の警視長
- ・ 飛行機墜落事故で死んだと思われる
- ・ 実は犯人グループの仲間

テンノウジアイル

天王寺アイル

女 ??歳

- ・ 偽名はRiley Reagan
- ・ 遺伝子学の学者

テンノウジフィリス

天王寺フィリス

女 ??歳

- ・ アイルの妹でそっくり

Dr. Yamazaki

男 ??歳

- ・ 陽気な遺伝子学の学者

クマダタクヤ
熊田拓哉

男 18歳 高校3年

・ 失踪中の男

ナカヤアツシ
中矢温志

男 53歳

・ 警視總監

ナカヤマミホ
中山美帆

女 享年8歳

・ 温志の娘

熊田??

女 ??歳

・ 拓哉の母

・ 夫は中矢温志……?

10匹目 来航 - 訪れた不穩 -

今日は七夕だ。この晴模様ならば今年は彦星と織姫は会えそうだ。だからといって我々警察には何も関係がない。その夫婦が会えようが会えまいが、日記を読んで昔の記憶を思い出しても、そんなことは関係ないんだ。

天の川の遥か下のこの世界には一生消えない傷を抱えた人がたくさんいる。

我々が犯人を捕まえることでその痛みは和らぐかもしれない。それでも、一生消えないだろう。大切な人、掛け替えのない人、愛する人と二度と会えない気持ちはその人にしか分からない。

1年に1度だろうが会うことの許された彼らは、少なくともそんな傷を持った人達よりかは幸せなのだろう……。

7月7日8時

警視庁・会議室

「願い事の1つでも書いてみませんか？」

私の目の前には西川がいた。彼女の優しい微笑みは貴重だ。

「そんなもので事件が解決するならいくらでも書きたいですよ、はっ」

そう言いながらも私は彼女が机に置いた短冊に手を伸ばした。

騒つく会議室。地図を広げる者。資料をまとめたり、読み返す者。各々が思いつく限りの仕事をしている中、私は部屋の一番奥の椅子にいます。

「そつえばなぜ西川警視長がここに？」

私は転がっていたマジックを広い上げ、蓋を開けたが悩んだ。

「いや、少し嫌な予感がしてならい……」

予感。それは何か起こる事を前もって感じること。嬉しい予感というものは大概外れるものだが、悪い予感というものはよく当たる。なぜなんだろう？

（ダダダダ！）

廊下から駆け足が1つ。

このうるさい会議室にいるのに聞こえるなんて、どれだけの慌て者だ？

「て、テレビをつけて下さい！！」

慌て者は一息に叫んだ。

その様子をいち早く察した1人がリモコンを押し、適当にチャンネルを回しニュース番組を探し当てた。

「……えー、繰り返しお伝えします！ 本日7時40分頃、東京湾に謎の大型船が侵入し、たった今港に停泊したとのことですよ！ どうやら予感が現実になりそうよ。」

私と西川は顔を見合せ、頷き、テレビの前に移動した。

「……えー、船の情報が分かりました！ 船名は「pupilla 11号」！ イタリアから世界一周のクルーズ中、一昨日から進路を変更し行方が分からなくなっていたそうです！」

日本に寄るなんて聞いてませんよね？ という顔で私は彼女を見た。彼女は無言で頷いた。

キャスターは興奮した様子でさらに続ける。

「中継が繋がったようです！ 現場の稲田リポーター！」

テレビの映像が切り変わる。場所は綺麗な一室を出て騒々しい外に変わった。

空も海も静かに、果てしなく青に染まっている。

「現場の稲田です！ たった今到着したんですが辺りは野次馬でごった返しています！ 船の中から人が出てくる気配はまだありませんねー」

映像が横に流れ船を映し出す。巨大な体を全てレンズに捕えることはできなかったが、船体に刻まれた船の名前は確認することができた。

「まさかあの中に熊がいたりしませんよねー」

1人が冗談のつもりで言った。もちろん本気にする者は誰もいない。私もその1人だ。

しかし彼女だけは曇ったままの顔をしている。

（ピリリリリ！）

私の携帯が鳴った。急いでポケットから取り出すと画面には”林田警視正”と書いてある。

「はい、田沼です」

「林田です。急で悪いのですが、今そっちに車で向かっているんです」

「なぜ？」

「嫌な胸騒ぎがしてならないんですよ」

「同じ理由で私の横に西川警視長がいますよ」

”私はうまく笑えずに言う。

「そうですか、西川警視長も……。あ、そういえばニュース見えますか？」

電話越しにカーナビの音が聞こえる。

「ちょうど見てるところです」

私はテレビに目を向ける。

今のところ発展はないようだ。

「そっちが気になるので一度寄ってみます」

そう言っただけ電話は切られてしまった。

「あつ、ちよつと……！」

私はこの時になって嫌な予感をしてしまった。

「何人が東京湾に向かってくれ、大至急だ！ 林田警視正もいる！」

私はテレビに釘付けになっていた部下に叫んだ。

「私達の悪い予感はどうやらアレが原因のようですね」

しかし彼女は無言のまま鋭い目つきで画面の船を睨んでいる。
我々も行くべきなのか、そう言おうか私は悩んでいた……。

東京湾

（キキーーー！）

2台のパトカーと1台の黒塗り高級車が停まった。

高級車から下りた私にパトカーから下りた男達が群がった。

「警視庁の者です」

男達は律儀に敬礼した。

「まだ変わった様子はないようだな」

私は目を細めて船を眺めた。

が、その時だった。乗船口の扉が蹴破られて降ってきた。

「と、扉が中から蹴破られました！ ですが、梯子が掛けられていないので下りてくることはできないはずですよ！」

近くでテレビリポーターが興奮しながら喋っている。

「お前ら、野次馬を離れさせる！ 嫌な胸騒ぎがしてならない……！」

私はいつそう厳しい顔になり指示を出した。

ゆっくりと船の方へ歩く。野次馬は遠ざかり、警視庁の刑事2人という。船との距離は10m。

「ど、どうやって下りてくるんですかね？ 乗船口は5mの高さはありませんよ」

私もそれには疑問だった。まさか熊が？ いや、そんなはずはなもし熊達が乗っているとしたら大変なことに……。

何かが乗船口から出てきた。頭上高くに跳んだそれは太陽の輝きによって黒い影にしか見れない。

「ぐぼあっ!？」

瞬きをした瞬間、影はそこから消え隣から叫び声がした。

身長190?を軽く超える毛深い筋肉質の男の振り下ろされた右腕によって刑事が1人、血を吐いて倒れた。そう、熊だ!

「まさか本当につ!？」

(パン!)

私は素早く銃を抜き熊の左足を撃ち抜いた。

「キヤアアアアア!？」

叫び声とともに野次馬は一目散に逃げ出そうとする。辺りはパニックになった。

「グオオアアアア!！」

船からは続々と熊が下りてくる。

「誰か本庁に連絡しろ! そんなでこいつらを絶対に町に行かせるな! ! 発砲を許可する、全責任は私が持つ! !」

警視庁

(ピリリリリ!)

再び携帯が鳴りだす。胸騒ぎはどんどん大きくなっていく。

「はい、田沼です」

私は電話に出た。

「あ、ども、高羽です!」

少し緊張気味の高羽だが、こちらにも恐らく車の中からだろう。特有の雑音が聞こえてくる。

「うまく説明できないんですけど……なんか、いても立ってもいられなくなりまして、車でそっちに向かってるんです!」

どいつもこいつも刑事の勘がよく働く。

私は苦笑いしながら西川に頷いてみせた。

「私の横に西川警視長がいて、東京湾には林田警視正が向かっています。皆同じ理由でね」

「東京湾……例の船ですね。私もそっちに向かった方がいいですか？」

「いや、あつちは林田警視正に……」

任せて大丈夫、と言おうとした時、騒めきが起きた。

テレビ画面に目をやると船の乗船口の扉が宙を舞っていた。

「行ってください！　すぐ、東京湾に！！」

私は携帯に叫んだ。

「は……あ、はいっ！」

高羽は少し驚きながらも、しかし何かを感じ取ってくれたようだ。

私は通話を切り、彼女の方を向いて言った。

「私達も、行くべきですね」

「……………」

彼女は相変わらず厳しい顔つきのまま何かを考えている。

「応援は出しましょう。でも私達はまだここに」

意外な返事だった。彼女なら真っ先に向かうと思っていたが、彼女

の予感是他の場所からなのだろうか？

私は部下をさらに数人、東京湾に向わせた。

その時、画面には林田と警視庁の部下達、そして……熊が映っていた。

10 匹目 来航 - 訪れた不穏 - (後書き)

東京湾

林田警視正

高速道路・東京湾行

高羽警視

警視庁

田沼警視正

西川警視長

11 匹目 開戦 - 三つ首と黒き幻 -

東京湾

船からは続々と熊が下りてきて、私達はあっという間に周りを囲まれてしまった。

なんとか野次馬を逃がす時間稼ぎはできたが、このままじゃ街中に進軍される勢いだ。

「け、警視正……私達は、どうなるんですか？」

1人の刑事が震える声で聞いてきた。

どうなるのなんてこっちが聞きたいくらいだ。だがそんなことは言えない。

「とにかくちゃんと銃を構えて襲ってきたら躊躇わず撃て。じゃなきゃ死ぬのは自分だ」

私は熊達がなかなか動き出さないことに違和感を感じていた。

（バババババ！）

船からヘリが3機、飛び立った。それを合図に熊達は動き出した。

（パン！ パン！）

私達は熊達の足を狙って銃を放つ。

しかし熊は見た目とは裏腹に素早い動きでそれをかわした。

「ふんっ！！」

私は自ら熊との距離を縮め、右拳で1匹の顎を打ち抜いた。

熊達は動きを止めて私を見ている。

「元警視庁第一機動隊隊長のケルベロスと恐れられたこの俺が相手だ！」

私は上着とYシャツを一瞬で脱ぎ捨て上半身裸になった。

浮かび上がる神経と血管。鍛え上げられた鋼のボディー。背中には赤い刺青で三つ首の獣が描かれていた。

「け、警視正!？」

後ろで驚きの声があがった。しかしいちいち説明している暇はない。

「死にたくなければ生きろ! 銃を取れ! 自分の命は自分で守れ! だが忘れるな……俺達の仕事は民衆を守ることだ!! そのためにこいつらを止めるぞ!!」

私はさらに襲いかかってくる熊を回し蹴りで吹き飛ばした。

「お、俺だつて!」

(パン! パン!)

刑事達の瞳には勇気という名の光が戻っていた。

警視庁

「どうして私達は行かないんですか!? 熊達はあの船に……!」

私は曇った表情のまま画面を見つめる彼女に怒鳴る。

彼女はゆっくりと私に向き直って言った。

「私の不安は船からじゃないの。……この船はきつと、罅よ」

ちょうどその時、船から飛び立った3機のヘリが青空に消えた。

「……何とかしてあのヘリの行方を追ええ!!」

私は残った刑事に指示を出した。

横で彼女は頷いていた。

「東京、神奈川、埼玉、千葉に緊急配備、並びに非常事態宣言を出しましょう」

彼女の目は不安で黒く濁っていた。それはきつと私も同じなのだろう。

「お前ら!!」

私は部下の顔を見回した。皆私に向かって頷き返す。

「任せたぞ……!」

再び東京湾

「こいつら次から次へと現れやがって……！」
私の身体は返り血で赤く染まっっていく。

（カチ！ カチ！）

「た、弾が！？ ……うわああー！！！」
「ハアア！！！」

弾切れになった刑事に猪突猛進する熊の腹に膝蹴りをお見舞いした。

「予備の弾薬は！？」

私は背中越しに聞いた。

「もうありません！」

その声はまた震えていた。

「使え！ 私にはコレがある」

私は自分の銃と弾薬を投げ渡し、右拳を掲げた。

とはいってもこのままじゃいつか限界がくる。応援はまだ来ないのか！？

「ぐああー！！！」

横目で刑事が熊に犯されてるのを見ながらも、私は目の前の熊で精一杯だった。

（ズシュッ！）

熊の鋭い爪が私の左肩に跡を残す。

熊達は野生の本能で私が一番危険だと気付いたのか、私は周りを囲まれてしまった。

「警視正！！！」

「自分の目の前の敵に集中しろ！ 私は大丈夫だ！」

……少し見栄を張ったことに後悔した。この状況はやバ過ぎる。

1匹を相手にするのもやつとなのに同時に……6匹だ。

「ふー………」

私は一度大きく深呼吸をする。澄み渡る空の青さを私は目に焼き付けた。

「ケルベロス、参る！」

覚悟を決めたその時。

（パァァン！！！！）

重なった銃声。6つの軌跡は熊の体を貫いた。

「な、何が……？」

倒れた熊を目の前にして私は呆然としていた。

黒い薄手のロングコートを纏い、フードを目一杯かぶった男が歩み寄る。怪しすぎるこの男を私は知っている。

クイックドロウ

右手には6連早撃ちをして銃口から白煙が昇る「コルト・パイソン」。左手には黒く光沢のある名もない拳銃、通称「黒き幻」。

「グルウウ……！」

（ズガンッ！！）

死に損なった1匹が体を起こそうとした時、男は右手の銃を腰にささった「デザートイーグル」に持ち変えて止めをさした。

「これである日の約束は果たした」

男はフードを外した。

「助かったよ高羽。狙撃の名手、銃神・ファントムの腕は落ちていないようだな」

「ここからは俺達に任せてもらう」

今の高羽の目は昔の銃神と呼ばれた頃のそれと同じだった。

私は自分の体が傷だらけなことにやつと気付いた。

「そうだな、頼んだ」

私はその場に仰向けに寝転がった。空は相変わらず青いままだ。

（パァン！　パァン！）

高羽が左手を挙げて合図を送ると、遠くの物陰に潜んでいた仲間

が一斉にスナイパーライフルの引き金を引いた。

あつという間に熊の数は減っていく。が、こんなに順調でいいのだろうか？

「林田警視正！ やつらが……！」

1人の刑事が指差す方を見ると熊達が街に向かって進軍していた。

「しまった！」

私は急いで立ち上がった。

「動けるのか？」

高羽は銃弾を補充しながら聞いてきた。

「まだまだ若い者には負けんよ！」

屈伸をしながら答え、第2ラウンドに備えた。

「俺の足は引つ張るなよ」

右を再びコルト・パイソンに戻した高羽は薄い笑顔を見せた。

「ぬかせ、小僧が」

私達はこの場をスナイパー達に任せ、街に向かった。

ヘリ・機内

「東京湾はどうなってるのかしらね？」

妹が意地悪そうな笑みを浮かべている。

「林田刑事がいたけどあんな冴えなさそうなオッサンじゃ、今頃は街中で好き勝手やってるでしょ」

私は眼下の高層ビル群を見つめながら答えた。

「そういう人に限って実は強かったりして！」

妹の笑みは崩れない。

「あの人は噂じゃ警視庁の第一機動隊隊長だったらしい」
司が呟いた。

「うっそ！？」

妹の笑みは崩れた。

「まあ、あそこは罔だな」

「そろそろ分岐点だよー」

通信機からYamazakiの声が出た。

「了解、うまくやってね」

私が通信機に言葉を返し、へりは二手に別れた。

11 匹目 開戦 - 三つ首と黒き幻 - (後書き)

東京湾・港町

ケルベロス

林田警視正

ファントム

高羽警視

東京湾

スナイパー

ヘリ・1号機

アイル

フィリス

司

ヘリ・2号機

Dr. Yamazaki

ヘリ・3号機

仲間1人

警視庁

田沼警視正

西川警視長

12 匹目 非情 - 正義の牢獄 -

都内某所

晴れ渡る空。澄んだ空気。いつもと同じ毎日が今日は違う。待ち焦がれたあの人に会えるのだ。7年間、どれほどこの日を待ちわびたことか。やっとこの子に自分の父親と合わせてやれるのだ。

そうだ、今日は3人でお祝いしなきゃ。うんとご馳走作って、3人で川の字になって寝るの。

「……ここね」

地図の通りに迷わずに着くことができた。

何やら今日は東京湾に謎の客船が出現したとか。私達には関係ないけどね。

「お母さん、何で病院になんて来たの？」

手を繋ぐ息子が不思議そうな顔で聞いてきた。

「いいから」

答えを告げられない私は玄関に見覚えのある顔を見つけた。河浦さんだ。

「河浦さん！」

彼の顔は強張っている。

無理もない。これから私は熊になった夫を見るんだ。これから息子は誰とも知らない熊を見るんだ。

「梢さん……」

彼は小さくお辞儀すると中に通してくれた。

2階建てで白塗りの小さな病院。中は全く人がいない。受付にいるのは恐らく覆面警官だろう。

彼は私達を連れて階段を下っていく。

「あの……下に行くんですか？」

私は少し不安になってきた。この病院の怪しさ。熊になってしまったとはいえ、あの人は本当に生きているのか、それすら信じられなくなってしまう。

「ええ……。あの、息子さんにも見せるんですか？」

彼は視線を足下に向けたまま口を開く。階段が心なしに長く感じる。

「そのつもりです」

私は小さい声で、でもはっきりと断言した。

彼は何度か小さく頷き、それ以上のことは喋らなかった。

階段は終わり、薄暗く幅の広い廊下が続く。

「グオオ……………」

廊下の奥から呻き声がする。

息子は私の手をギュッと握る。私も反射的にほぼ同時に握っていた。

「さあ、行きましょう」

顔は一度こちらを振り向いた。とても悲しそうな顔をしていることを私と息子は感じ取った。

外

「よし、最後はこの辺で降ろそうか」

3度目の着陸地点。僕は無線で仲間と話ながらへりを屋上に降ろし、熊達を解き放った。

「Yamazakiさん、この後はどうするんですか？」

無線からの声は愛機「AH-64D アパッチ・ロングボウ」を操縦する元イギリス陸軍「中村ゴンザレス」中佐だ。

「予定通り隠し要塞「ジャステイス」を熊達に襲わせる。中佐は合図があるまで待機していてください」

隠し要塞ジャスティス、それは警察が裏金で作り上げた基地の1つだ。外見こそただの小さな病院だが地下には無数の牢屋がある。そこには普段、凶悪犯達が幽閉されているが今はおそらく生け捕りにされた熊達がいるはずだ。

「了解」

中村の返事で無線は切られた。それと同時に熊達が続々と姿を現す。

こいつらは私達を襲わない。理由は後々話すとして、さっそくジャスティスに行ってもらおう。

（ピイイイ！）

常人には聞き取れないほどの高音が鳴る笛の音を聞き、熊達は僕の後をしつかり着いてきた。

ジャスティス・内部

「あの……河浦さん？」

目の前には黒塗りの鉄の壁、その中央には赤い扉があった。私達はそこで立ち止まっている。

扉の横には大柄の刑事が2人、アサルトライフル「89式5.56mm小銃」を肩にかけて立っている。

私は立ち止まる河浦さんの背中に声をかけた。

「グオオ……！！」

壁の向こうからは熊の雄叫びが重なりあっている。

優太は両手で私の手をしっかりと握っている。私もその手を勇気づけるように握り返している。

「もう一度聞きます。……優太君もこの中に連れて行くんですね？」

河浦さんはこちらを振り向いた。その顔つきは今までに見たこと

のないくらい真剣だった。

「もちろ……ん？」

私は優太の異変に気付いた。目をギュツとつむり必死に首を横に振っていた。

「梢さん……！」

河浦さんは鋭い瞳で私の答えを急かした。

「……………私は……………！」

その時、私の脳裏には熊の姿になったあの人が浮かび上がった。

「……………私だけ行きます」

私はすぐに優太を2人の刑事に預けたことを良かったと思うことになった。

赤い扉は厚さが10?以上もある。それにもかかわらず廊下にまで声が響いていたのだ。

……………中は酷かった。廊下はさらに続き、枝別れするように道は無数に存在した。そして壁には同じような赤い扉が連なり、その向こうから熊の声がしている。

「優太を、連れてこなくて良かったです……………」

壁も床も天井も黒い。唯一の光は天井に等間隔に設置されている切れかけの青い電球達。唯一の色は扉の赤だ。

「……………ここです」

河浦さんは1つの赤い扉の前で止まった。

この先にあの人がいる。7年間会うことができなかった愛する聖夜がいるのだ。

（ギイイイイイ）

扉の開く錆付いた音が耳をかける。

……………。

その中には音も光もない。暗闇だけが存在した。

（……………ジャラ……………）

そんな世界に音がした。鎖が床を滑る音だ。

「ここにある全ての部屋に電気はありません」

私は目が馴れるのを待とうとした。だが、それより先に向こうの
声で腰が抜けてしまった。

「グオオオーーーー！！！！！」

（ジャラ！ ジャララ！）

手足だけじゃなく体ごと鎖で動きを封じられていたのだ。

ストレスの溜まった喚き声はまさに野生のそれを彷彿とさせる。

「……………せい……………や？」

私は後退り壁にもたれかかる。

それに気付き、河浦さんが一度廊下に連れ出してくれた。

「あれが今の聖夜です。治す方法もない。殺すこともしたくない。

私達もどうすればいいのか分からないんです……………！！！」

河浦さんは怒りに任せて壁に拳を突き立てる。やりきれない気持ち
ちは皆同じだったんだ。

「グオオオオーーーー！！！！！」

「ガアアアーーーー！！！！！」

「ゴオオオアアアーーーー！！！！！」

その時、何かに反応したかのように熊達が一斉に吠えだした。

（ギシ……………ギシ……………）

「く、鎖が……………！」

私は聖夜がいると思われる方向を指差した。

「大丈夫ですよ、いくら何でも全身に巻き付いた鎖を破ることは…

……………！！！」

鎖は……………破られた。私達の目の前で聖夜は自力で身体の内を自由を手
に入れた。

飛び散った鎖の欠片が転がってくる。それと同時に獣の足音が近
づく。

「早く鍵を……………！！？」

（ドオオーーーーン！！）

遅かった！ 赤い扉は蹴破られ、正面の壁に激突し床にひれ伏し
た。

「くそっ！」

河浦さんは腰から拳銃「コルトM1917」を抜くが、銃口を向ける前に聖夜の腕に体ごと吹き飛ばされてしまった。

「ぐはあっ！」

衝撃で鉄の壁がへこんだ。

「河浦さ………！」

私の声を制止させるかのように彼は掌をこちらに向けた。きつと聖夜の注意を私に向けさせないためだ。

「テメー、嫁さんの前でみつともない格好……見せてんなよ！」

彼はコルトを左肩目がけて放った。高速の回転を加えられ、空を裂いて進む銃弾を聖夜は左手で掴み取ってしまった。

「バカな！？」

すかさず2発目の引き金を引こうとしたが聖夜はそれを許さなかった。

キャッチした銃弾をでこぴんの要領で中指で弾くと、河浦さんの右腹部に突き刺さった。

「ぐふおっ！？」

片膝について痛みに耐える彼に熊と化した聖夜は追撃を加えた。下から伸びる右拳が河浦さんの体を吹き飛ばし、再度壁に叩きつけた。

さらに回転を加えた回し蹴りで鉄の壁が砕けた。幸いにもそこは空き部屋のようなだった。

「もう止めてー！ー！ー！」

瓦礫の上に力なく寝転ぶ河浦さんに止めの一撃を与える瞬間、私は聖夜の前に立ちはだかった。

両手を目一杯に広げ、涙を流して彼を必死に見つめた。

「グオオオー！ー！ー！」

振り下ろされる拳。もう……ダメだ！

……。

「……………えっ！？」

恐る恐る目を開くと、信じられない光景がそこにはあった。

聖夜が自分の右拳を左手で必死に押さえているのだ。その瞳からは一滴の水が流れた。

「お願い、もう止めて！　優しかったあなたに戻って！！」

私は聖夜の腕の中に自ら駆け込み、その唇にキスをした。

優しい淡い光が辺りを包む、そんな感じがした……。

ジャステイス・外

「さあ熊共、行け！」

（ピイイイ！）

僕は笛を吹きながらジャステイスの正面玄関を指差した。

熊達は雄叫びを上げて駆け込んだ。僕もその後をゆっくりと続く。やつらは”食事”になると私達までも襲いかねないからな、巻き込まれてはかなわない。

「下だ、下！」

（ピイーーーー！）

ヘリでじつとしていたことがずいぶんとストレスだったんだろう、動きがとても機敏だ。

「熊を解放し町に放つ。ふふ……」

その景色を思い浮かべるだけで笑いが零れてしまう。

「グオオオーーーー！！」

（パアアン！）

どうやら警備の刑事と交戦のようだ。僕は銃声のするほうへ急いだ。

「うわああーん！」

刑事の後ろで子供が泣いている。熊の餌にはベストな年齢だ。が、なぜこんなところに子供がいる？

「……使えそうだな」

（ピ。ピ。イ。イ。イ。）

熊達は動きを止めた。見ると裸体が2つ転がっている。

（ピッ！）

僕はそれを指差して笛を短く吹く。すると熊達は欲望を解き放った。

「坊や……ちょっと協力してもらおうよ」

13 匹目 再会 - 包帯男と三獣神 -

「……………梢」

私ははっとした。名前を呼ばれたからじゃない。その声にだ。

「ありがとう、梢」

例えどれだけの間離れていても忘れない、忘れらるわけがない、愛する人の呼び声だ。

「お帰り……………なさい！」

私はとめどなく溢れる涙を気にせずに聖夜に抱きついた。

（ギイイイイ……………）

扉の開く音が響いてくる。

「何だ！？」

俺は一旦抱き付くのをやめた。

「グオオオーーーー！！」

すぐに熊の叫び声が続き、足音と共にそれは近づいて来る。

「まずいな」

「……………あつ、河浦さん！」

梢は気付いたように瓦礫の上に倒れる男に駆け付けた。

「竜一！？」

意識がないようだ。

俺は竜一の手から銃を奪った。コルトだ。残弾数は5 / 6発。

「私に貸して」

そのコルトを梢がさらに奪った。竜一のポケットから予備の弾もくすねている。

「でも……………！」

「私を誰だと思ってるの？ 元警視庁特殊部隊狙撃支援二班の梢隊長よ！ 元SATの私に任せなさいって！」

銃を持った彼女の目は人が変わったように輝いていた。

「さすがフェニックス。どんな死線も潜り抜けてきたんだもんな…
…分かった、任せるよ」

「夫婦でいちゃついでるなよな」

不意に声がした。

俺と梢は同時に竜一を見たが気絶したままだ。

「聖夜、お前は竜一と一緒に引っ込んでいろ」

空き部屋だと思っていた部屋の奥から全身を包帯に包まれた男（
？）が現れた。

手には散弾銃の「レミントンM870」が握られている。

「なぜ俺の名を……！？」

「来たよ！」

俺の質問は答えを貰う前に消えた。

この薄暗い中でも梢には遠くが見えていた。

（パン！ パン！）

俺は言われた通りに竜一を担いで部屋の中に隠れた。

「このままここにいても銃弾が尽きたらお仕舞いだ。出口を目指すぞ」

包帯男がショットガンを構えながら先頭をきった。

「私が後ろから出口までを指示します！」

銃の性能から梢は先頭を包帯男に任せ、後方支援に回った。

俺は竜一を背負ったまま2人の間に位置した。

（ドウン！！）

この場所での散弾銃はかなり効率が良いようだ。

都内・街中

「はぁ……はぁ……！」

港からどれだけ進んだのだろう？ 町には熊が溢れ返っていた。

（ズダンッ！！ スダンッ！！）

「やはり歳か？」

デザートイーグルをぶつ放す高羽と私とでは歳の差は2つしかないのだが、やはり40を越えているのといないのとでは違うな。

正直かなりキツイ。

「……………あれは……………」

私は一際周辺に熊が多い建物を見た。

「高羽、あそこに行くぞ！」

私は息を吹き返して走り出した。

「まさか……………ジャステイスなのか！？」

だとしたらヤバイ。中には熊となった人達が大勢いる。なんと少しでも食い止めなければ！

「そろそろソレも使う時期かもな」

私は高羽の切り札、黒き幻を見ながら言った。

「お前がくたばりそうな時になら使ってやるよ」

憎まれ口は相変わらずだな。

私達は熊の群れの中に突っ込んだ。

「ウオオオーーーー！！」

（ズカツ！ ドスッ！）

「ハアアアーーーー！！」

（ズダンッ！！ スダンッ！！）

ヘリ・1号機

「……………そろそろだ」

運転席の司が呟く。

「とりあえず近くで一度着陸して熊達を放つ。再度離陸して一気に

目的のフロアに侵入するわ」

私は今までの空気を一変させ、張り詰めた緊張感を出した。

「まさか本当に警視庁に攻め込むなんて思いませんでしたよ」

妹は表情を崩さずに言う。機内に同じ顔が2つあるというのはなかなか妙なものだ。

「今回の私達のミッションは警視総監の拉致よ。確保できしだい、すぐに退却する」

「熊達はどうするんだ？」

司が体を傾けるとヘリが同じ方向に進路を変えた。

「例の場所に戻るように笛を鳴らすわ。司は上空で待機、打ち落とされないでよ？」

「私がそんなヘマをすると思っているのか？」

ヘリは高度を一気に下げ、警視庁近くの空き地に着陸した。

（ピイイイ！）

「目標地点は警視庁、警視総監室。……さあ、行くわよ」

ヘリは再び大空へと飛び出した。

ジャステイス・内部

（ドゥーン！！）

「道はこつちで合ってるんだな？」

包帯男は熊を確実に散弾銃で仕留めていく。さらに後方からの梢の援護が絶妙なタイミングで入る。

こいつがSATにいたことなんてすっかり忘れていた。

「そこを左！ そしたら階段が………！！」

梢は気付いた。

「ゆ、優太が……いない！？」

息子の姿がどこにもない。熊に襲われた2人の刑事は裸で倒れて

いるが、優太はどこにもいない。

「優太も来てるのか!？」

俺も辺りに目をやるがそれらしき姿は見当たらない。

「……とにかく一度地上に出る!　ここに留まっていたんじゃ俺達が死ぬ!」

包帯男は散弾銃を連射して階段を駆け上がる。俺と梢は後ろ髪を引かれながらも包帯男を追った。

「……おかしい、急に熊の数が減ったぞ?」

包帯男の散弾銃は火を噴くのを止めた。

「上に仲間でも来てるのか?」

俺は梢の顔を見た。

「唯一知ってそんな人はあなたの背中で気絶してるわ」

その言葉で急に竜一の重さが増した気がした。登りの階段はつらい。

「……地上だ!」

包帯男は散弾銃をしつかりと構えながら階段を登りきった。

俺達もそれに続いて1階に到着。

「こ、これは……!？」

俺は言葉が出なかった。何体もの熊が息絶えていた。

そしてエントランスの中央に男が2人いる。

「高羽君!　林田さん!」

最初に声をかけたのは何と梢だった。

向こうは驚いた顔で彼女を迎えた。

「梢隊長、何でこんなところに!？」

高羽と呼ばれた男はヘコヘコしながら驚きを隠せずにいる。

「もう隊長じゃないわよ。夫を助けに行ってたの、ふふ」

梢が俺に視線を送り、2人もこっちを見てきたのでとりあえずお辞儀をしておいた。

「神奈川県警の小口聖夜巡查長です」

梢の知り合いでしかも隊長と呼んでいるということは同業者で間

違いないだろう。

「山形の高羽警視だ、昔は梢さんの班にいたんだ」

「この子の銃の腕は私並よ！ 銃神・ファントムなんて呼ばれていたんだから！」

どうりで梢に頭が上がらないわけだ。 つか警視って偉！ なのにその黒ずくめの怪しい格好は何だ？

「京都府警の林田警視正です」

「この人は警視庁の第一機動隊にいたんだけど一緒に事件に当たったことがあるの。昔はイケメンで強くてケルベロスなんてあだ名だったのよ！」

こ、今度は警視正！？ そんな方々が何でこんなところに！？ つか俺だけ場違いでしょ、ケルベロスにファントムにフェニックスって…… 生きる三獣神？

「そういえば包帯男は……？」

俺は辺りを見回した。すると玄関の方に歩いていた。

「おい、包帯男！」

俺が駆け寄ると同時に外でヘリの音がした。

俺達は急いで外に出るとヘリから垂れ下がる縄梯子に捕まるいかにもな科学者がいた。

その腕には1人の子供…… まさか！？

「優太……！！」

梢は必死に声を張り上げる。しかし声は届かない。

優太は俯いたままだ。恐らく気絶しているだろう。

「この坊やを帰してほしくば今夜10時に東京タワーの特別展望台に来たまえ」

その言葉を最後にヘリはビルの陰に消えた。

「（優太…… 必ず助けるからな！）」

俺は心の中で自分自身に誓いを立てた。

「聖夜」

包帯男はその包帯を外し始めた。 いったいこの男は何者なのか…

…、その謎はすぐに吹き飛んだ。

「お前……………生きてたのかよ……………井川！！」

包帯の中から現れたのは井ノ部と心中したと思っていた井川拳次だった。

俺は涙目になりながら思わず抱きついた。

「やめる気色悪い！」

井川は笑いながら俺を引き剥がす。

「でも何で生きてて、何でこんなところに？」

あの時、確かに首に噛みつかれて頸動脈をやられたはずだ。生きてる可能性なんて万に一つもないと思っていた。

「実はあのバカ、俺の首じゃなくて自分の手に噛み付きやがったんだ。それで耳元で言ったのが「俺を殺してくれ」だ。そしたら後から来た刑事共に熊と勘違いされて気絶させられて、気付いたらあそこになっていたわけだ。散弾銃を何で持ったのかは分からないけどな」

こんなことがあるのか？ コンビが生んだ奇跡とも言うのか。

「私は信じるよ、そんな奇跡みたいな話でも」

梢がニコニコしながら俺を見ている。何か良い事でもあったのだろうか？

「まあ、お前が生きてるってことはそうなんだろうな」

俺はもう一度井川に抱きついた。

「再会を喜ぶのはそこまでにして、とりあえず本庁に戻って作戦会議だ。フェニックス専用銃もまだ置いてありますよ」

場をまとめたのは林田警視正だ。さすがは警視正だな、うん。

「まずは戻って一息つきたいぜ、重傷者もいるみたいだし」

高羽警視は皆を見回してボロボロだな、と笑い出した。

「あ、竜……………」

そして俺達はこれから戻るんだ、たった今警視庁が襲撃されているとも知らずにそこへ。

13 匹目 再会 - 包帯男と三獣神 - (後書き)

ジャスティス・内部

聖夜
フェニックス

梢

拳次

竜一(気絶)

ケルベロス

林田警視正

ファントム

高羽警視

ジャスティス・外

Dr. Yamazaki

優太(拉致)

中村中佐(操縦)

警視庁・内部

田沼警視正(指揮監)

西川警視長

中矢警視總監

警視庁・周辺^{ヘリ}

アイル

フィリス

司(操縦)

餌図鑑 Extra (前書き)

今回は画像がメインです。
下手な絵でお許しください。

餌図鑑 Extra

熊 - 1

> i 1 0 7 0 6 — 1 3 1 3 <

「7匹目 熊」で山崎さんが皆に手渡したコピー写真。

作者が学校の授業中、しかも中学生が見に来ててカメラマンもうつろついでる時に書いたという曰く付きの1枚。ってか描いている時に至近距離で写真撮られましたwww

「熊田」と後ろに字が書かれています、作者は習字を習っていないため、ノリですw

熊 - 2

> i 1 0 7 0 7 — 1 3 1 3 <

元々はケルベロスこと林田さんを描こうと思っていたが、できが悪かったので熊の1匹にしました。

筋肉3割増で暴走中！お手本は「ドラゴンボール」

ファントム

> i 1 0 7 0 8 — 1 3 1 3 <

警察官の面影0の高羽さん（笑）

ちよつと若すぎたのでSAT時代ってことでW
お手本は「BRAK CAT」

伊東友喜

> i 1 0 7 0 9 — 1 3 1 3 <

「22匹目 青空の下で」にだけ出てきたチョイ役の彼。
ファントムにそっくりですがそこは作者の実力不足……orz
若干V系を目指した髪型で描いて見ました

西川里奈

> i 1 0 7 1 0 — 1 3 1 3 <

はい、警察官の服が分からなくて勘で描いたらジャージーみたくな
りましたWWW

真面目な時なので目つきは悪くしてみました。

……後ろからって難しいね。

全作画：夢見月空音

餌図鑑 Extra（後書き）

携帯からの閲覧の場合での要領オーバーを防ぐためにページ数を多くしています。
ご了承ください。

暇があればもっと描いてみたいです

14 匹目 惨劇 - 飼い主を追って -

警視庁・会議室

「本庁付近に多数の熊が出現！ ここを目指して迫ってきています！」

「市民の避難、間に合いません！」

「上空に謎のヘリを確認！ 数は1！」

「くっ……とにかく市民の安全確保が第一だ！！」

熊の突然の出現により会議室は大騒ぎになっている。

とそんな時、西川警視長が席を立った。

「どちらに！？」

「警視総監に発砲と熊の射殺許可を貰ってくる！」

「私も……！」

「指揮官は持ち場を離れてはなりませんよ」

男顔負けの勇ましい笑顔を見せ、彼女は部屋を出ていった。

それと同時にヘリが1機、ガラス張りの本庁の外壁を急上昇していった。

「西川警視長……」

しばらく考えた後、会議室を大杉警視に任せて私は彼女の後を追った。

警視総監室

「田沼は何をやってるんだ！？ 早く騒ぎを収拾させるように急がしていい！」

中矢警視總監は高級な座椅子に踏ん反り返りながら警視總監補佐の男に怒鳴り散らした。

（……………バババババ！）

微弱なヘリの回転翼の音が次第に大きくなり、巨大なガラス越しにその姿を現した。

（ズガガガ！！）

ヘリの扉は開いており、女が重機関銃を連射した。

轟音と共に傾れ込む銃弾の横槍が一瞬でガラスを粉々にし、補佐官の男は蜂の巣になり原形を留めることなく床に散らばった。

恐怖に支配された中矢の体は1？も動こうとせず、その間に黒いスーツを着た女が2人、ヘリから飛び出してきた。

床に着地するとその勢いのまま前転をし、1人は廊下へと続く扉の鍵を閉めてそのままそこでサブマシンガンを構えたまま立ち、もう1人は机を挟んで中矢の正面に立ち、ワルサーP22の銃口を彼に向けている。

「大人しく従ってもらおうか」

（パアアン！）

渴いた銃声の直後、いや、ほぼ同時に銃弾は中矢の右胸に着弾した。

彼は痛みを感じる暇もなく意識を失い、机の上に眠った。

「さすがドクター特製の麻酔弾、凄い効き目の速さですね」

フィリスは感心したような顔で眠りに落ちた男を見た。

「さつさとヘリに運んで退却よ」

アイルは銃を腰のホルスターに仕舞い、中矢を軽々と担いでヘリから降ろされた縄梯子に向かった。

（ドンドンドン！）

「警視總監、今の銃声は何ですか！？ 扉を開けて下さい！！」

鍵のかかった扉を外側から叩く女性の声が聞こえた。

「フィリス」

アイルは縄梯子にしっかりと捕まってから妹を呼んだ。

「分かってるわ」

フィリスは扉に向かってサブマシンガンの引き金を引きながら、開け放たれた窓の方へ後退る。

残弾が尽きる前に引き金から指を離し、ポケットから取り出した紙切れを床に落とし、縄梯子に掴まった。

茶色い扉には無数の穴が開き、そこからはかすかな白煙が昇っていた。

扉の向こう側からしていた声は、今はもう聞こえない。

（ピイイイイ！）

「司！！」

熊を誘導する笛を吹いた後、フィリスが機体に向かって叫ぶとへりは建物から離れ、やがて煙幕弾を放ち、回転翼の音だけを残して姿を眩ました。

エレベーターを待っていていられなかった私は階段を1段飛ばしで駆け登っていく。

その途中、あと少しで警視總監室というところで銃声が鳴り響いた。

連続した3秒間程の轟音、機関銃の何かだろう。

「ハア、ハア……っ！！ 西川警視長！？」

扉とその正面の壁、それを繋げる床には無数の弾痕。

微小なコンクリート片が行き場を知らずに彷徨って、辺りを白く曇らせていた。

壁に沿って静かに近寄った私は、銃弾によって開けられた扉の穴の1つから部屋の中の様子を伺った。が、姿どころか人の気配すらなかった。

あるのは小さくなっていくヘリの音と、床に寝る白い紙切れだけだ。

「西川警視長、大丈夫ですか！？」

彼女が倒れている場所はボロボロになった床の脇だ。

おそらく扉の正面にいたのだろうが反射的に横へ移動したおかげで、大量の銃弾をもろに受けずに済んだのだろう。
私は彼女を抱き起こす。が、掌に生暖かい液体を感じた。それを見たとき、私の顔から血の気が引いた。
黒々とした赤で染まった手。そう、彼女の血だ。

会議室

「大杉警視、我々も上に行きましょう！」

「今の銃声はただ事じゃないはずです！」

「西川警視長と田沼警視正が向かったんだぞ。大丈夫だ、2人を信じて！」
今は熊をなんとかして、市民の安全の確保だ！」

最後の銃声の直後、会議室にいた刑事達が大杉警視に詰め寄って来ていた。

しかしここで彼らを上に行かせるわけにはいかない。
なぜなら……。

（ある日、森の中）

携帯の着信音が鳴る。刑事達はしぶしぶ仕事に戻り、この音には気付いていないようだ。

画面を確認すると田沼警視正の名前が表示されている。が、大杉がその着信に出ることはなかった。

椅子に腰掛け、机に肘をついて組んだ両手を額につける。腕の隙間から見えるのは、かすかに口角が上がった彼の口元だった……。

7月7日・18時

警視庁・小会議室

狭い部屋には目に見えない何かが覆いかぶさるように沈んだ空気が流れていた。

縦長の部屋には長机が綺麗に”0”を型取り、一番奥に田沼警視正兼指揮官が。その横に腰を下ろしているのは大杉警視。向かって右側には奥からケルベロスこと林田警視正、ファントムこと高羽警視。左側には井川巡查長、聖夜巡查長、そしてフェニックスこと元SATの梢。さらに現SATの隊長や機動隊の隊長等々、戦力となりうる隊の隊長がいる。

「……というわけで、小口巡查長の息子さんがへりでさらわれ、20時に東京タワーに来いと言ってました」

要塞ジャスティスでのことを林田が報告した。

「河浦巡查長は病院で意識が戻りました」

何のかは分からないが、大杉は書類を捲りながら言った。

聖夜はその言葉に少し安心を覚えた。

「警視庁ではへりで直接警視総監室に乗り込んだ犯人グループが矢中警視総監を誘拐。さらに駆け付けた西川警視長が銃弾を4発受ける重傷を負い、運び込まれた病院での緊急手術の末、一命は取り留めたものの未だ昏睡状態のようです」

田沼の拳は喋るにつれてより強く握られていった。

「あの、ところでそちらは……？」

大杉が疑いの目で見たのは余所行きの服を着た短髪の女性だ。

「元警視庁特殊部隊狙撃支援二班の隊長をやっていました、小口の妻の梢と言います」

梢は自ら自己紹介をした。すぐ後に高羽の、自分の先輩です、という声が聞こえた。

「それで、退職された人が今更……」

「分かりました、このまま会議にご出席下さい」

大杉の言葉を遮ったのは指揮官、田沼だった。

大杉は一瞬だけ不満な表情を見せたが、すぐに平静を装った。

「それで、これから私達はどうすれば……？」

会議ではファントムの面影がない高羽が言った。

「行くしかないだろ、東京タワーに。例えどんな罠があろうと、犯^や人を一網打尽にできる最初で最後のチャンスだ」

田沼はゆっくり、しっかりと声で言い放った。

そして続けてこう言った。

「まず、近辺の警察署にいる手の空いている警官に市民の避難をしてもらおう。

その後、S A Tと機動隊で目標の周囲と上空を戦圧。

内部に侵入するのは……」

「私達が行きます！」

いくつかの声が重なった。聖夜、梢、高羽だ。

「……やつらがどんな状況で待ち構えているか分からない。詳しいことは着いてからもう一度決めよう」

席を立った戦士達は、それぞれの想いを抱えながら最後の戦いに備えた。

東京タワー・前

時間は確実に22時に向かい、それに比例するように準備は進んでいた。

「市民の避難、完了しました！」

大杉はタワーを見つめる田沼の背中に言った。

「S A T、機動隊共に配置に着きました。ヘリもいつでも飛べる準備が来ています」

大杉に続いて2人の隊長が駆け寄った。

「こっちもいつでも行けますよ！」

戦士達は横一列に並び、田沼の指令を待った。

「今日で全国児童襲撃事件を終わらせ、その犯人を捕まえる。……行くぞ！」

時刻は21時30分。

終わりへの針は進み始めた。

15 匹目 闘争 ・それぞれの戦いへ・（前書き）

お久しぶりの更新です！

見捨てないで最後まで暖かく見守ってください（<―>）

15 匹目 闘争 - それぞれの戦いへ -

長きに渡り街を照らし、日本のシンボルとして輝き続けたタワーの明かりは消えていた。

まるで今までの自分は偽者でついにその手の内を開けるかのように、黒く、重く、彼らの目の前に聳え立っている。

エンジン音を上げて飛び立ったヘリ達は旋回しながらそのタワーを照らし始めた。

「ガ…… ガガ……… 警察諸君」

突如発せられた声は女のもの…… 天王寺アイルだ。

「どこから!？」

彼らは辺りを警戒しながら声の発信元を探した。

「私は特別展望台にいます。警視総監様と子供には手をつけていないわ、今はね。タイムリミットは今日。日付が明日に変わったら2人は死にます」

「何が目的だ!！」

スピーカーの音量を最大にして田沼は叫んだ。

「目的ね…… 私達は警視総監様が殺せばそれでいいのよ。でも、ただ殺すんじゃないでしょ? だからこの人の目の前でこの人の部下がこの人の為に死んでいくところを見せたいの」

「クソッ! なめやがって……!！」

聖夜は彼女がいる特別展望台を睨んだ。

「それじゃあ皆さん、シヨ一の始まりよ…… ガガ………」

「シヨ一の始まりだと……?」

高羽はデザートイーグルを抜いた。

「…… タワーの入り口を照らして!」

何か見つけたかのように梢は指を刺して叫んだ。

機動隊の隊長は無線を繋げて言われた場所を照らすように指示し

た。

「アレは……!!」

「ちっ、まだあんなにいやがったのか」

林田が気づいたのに続いて高羽が呆れたように言った。

「……熊は任せていいですか？」

田沼はS A T、機動隊の隊長に言った。

「ま、まさか皆さんが中に行くつもりですか!？」

S A Tの隊長は当然困惑した。

「当たり前だ!」

即答したのは既に戦闘状態の聖夜だ。

「し、しかし……」

「もちろんいいわよね？」

簡単に首を縦に振らない2人に梢は笑顔で詰め寄った。

「……分かりました」

2人は渋々承諾した。

「（おい、お前の嫁は何者なんだ?）」

皆の目が梢達に向かっていている中、田沼は小声で聖夜に話しかけた。

「（い、いやー、俺も手におえないっす）」

聖夜は苦笑いしながら答えた。

「これより全勢力を持って熊を排除し、タワーへの道を開ける!

総員、心してかれよ……行け!!」

機動隊の隊長の声で幕は開けられた。

「グヲオオオオオ……!!」

「おおおおお……!!」

「熊が全滅するまで待っているわけにはいかない。間を縫って進むぞ」

「ここにいる熊が今までの熊より明らかに強いと気づいた田沼。

「……田沼警視正、あなたはここにいてください」

それまでずっと黙っていた大杉が口を開いた。

「指揮官のあなたをこれ以上現場に出せません」

「しかし……」

「自分も同意見です」

大杉の案に乗ったのは高羽だ。

「あんな奴らしくらい自分達だけで大丈夫です！」

聖夜と拳次は同時に言った。

「ま、あなたは奥の手ってことで」

林田は田沼の肩を掴んで無理矢理パイプ椅子に座らせた。

「行くぞ、お前ら」

高羽はタワーを睨みながら口元だけ笑っていた。

「お、おい！ 待てっ！」

田沼の制止を振り切って聖夜、梢、拳次、林田、高羽は走り出してしまった。

「ったく……で、何でお前も残った？」

田沼は大杉を睨んだ。

「決まっているじゃないすか、俺は……」

「何で熊共は急にこんなに……！？」

先頭を走りながら高羽はコルト・パイソンを乱射しているが、熊達は驚異的な反射神経でことごとくかわしていく。

「これじゃあタワーまで辿り着けない……！！」

聖夜も拳銃を放つがやはり当たらない。

（ガガガガガ！！）

「我々が道を！」

轟音と共に現れたのはSATと機動隊に隊員だ。

「すまない！」

高羽を銃弾を補充しながら走り続けた。

「ゴオオ！！」

「ぐはあ！？」

変わって先頭を走っていたSATの隊員は降って来た熊に潰され

聖夜は降りてくる箱を見上げながら呟いた。

空

「こちら4号機、以上な……ん？ あの機体は……ま、まさか!？」
(ドゴオオオー……ン!!)

「よ、4号機!？ 応答しろ4ごう……!!」

突如爆発した2機のヘリの煙の中から1機のアンノーンが現れた。

「こちら8号機！ 敵機確認、迎撃を開始する！」

装備されたヘビーマシガンを放ちながら8号機は近づいていた。

「待て8号機、迂闊に近づいては……くっ！ こちら1号機！ 各機迎撃を開始せよ！」

「平和ボケした日本の軍人が、鬼龍と呼ばれたこの中村ゴンザレスを殺れると思うなよ!!」

アンノーン機体は銃弾の雨を優雅にかわしながらSATと機動隊のヘリを返り討ちにしていった。

「ん？ 1機沈め損ねたか」

「平和ボケしてるかどうか、思い知らせてやるさ」

アンノーンと正対したヘリに乗っているのは田沼だった。

……。

「ヘリを借りるぞ」

俺は立ち上がったってヘリの待機場所に向かった。

「田沼監視正!？」

「この戦いに作戦などない。私がここにいてもやれることはないさ」

「……………」

SAT、機動隊の隊長は顔を見合わせ、頷いてどこかへ消えた。

「お前はどうするんだ、大杉？」

俺は背中を向けたまま聞いた。

「好きにさせてもらいますよ、俺もね……………」

大杉もまた、立ち上がってどこかへ歩き出した。

「残念だがお前はどこへも行けないよ」

「どういう意味……………！？」

振り向いた大杉の目の前には拳銃を構える男がいた。

…………俺だ。

（パァン！！）

「どう……………して……………？」

大杉は瞳を開いたままうつ伏せに倒れた。

地面には紅い水溜りが広がっていく。

「お前が天王寺アイルと繋がっていることは知っていたさ。なぜな

ら俺は……………」

16 匹目 星屑 - 散る刻は一瞬に -

タワー・入り口

「……来たわよ」

梢はエレベーターの前で銃を構えた。

「何も出てくんなよ……！」

拳次も祈りながら銃を向けた。

……。

「よし、行くか」

中に怪しいモノが無いことを確認してから一向は上へ向かった。

空

「どうした！ 威勢がいいのは最初だけか！？」

田沼は中村の攻撃を紙一重でかわし続けていた。

「それは俺に銃弾の一発でも入れてから言っただな」

田沼は機体を急旋回させて一瞬で中村の背後に回り込んだ。

「何い！？」

叙々に口調が荒くなる中村は間一髪、田沼からのグレネード弾を回避した。

「貴様、ただの警官じゃないな！？」

「……ああ」

「何者だ！？」

2機は空中で静止し、無線を通して話し始めた

「俺は……お前らと”同類”だよ」

「同類……だと？」

「正確にはお前以外のお前ら、と言ったほうがいいかな」

「……そうか、そういうことか！ で、そんな貴様の狙いは何だ？
まさか本当に警視総監様を助けたいだけなんて言わないだろうな
？」

「俺はまだ動く気はない。お前らが暴れたいなら暴れればいい。だがな、これだけは言っておく……中矢を殺るのはこの俺だ！！」

「はっはっは！ やっぱりそういうことか！ だがまあ、それなら俺達がここで殺し合う意味はもう無いだろう」

「そうだな」

「なら俺は行くぜ。つつつても俺の仕事はもう終わっちまったがな
！」

中村が方向転換をして背後を見せた時だった。

（カチッ）

「なっ！？ 貴様……！！」

田沼はグレネード弾の発射スイッチを押し、打ち出された弾は中村の愛機を粉々に粉碎した。

「殺し合う理由が無いが、俺がお前を殺す理由はあるんだよ。俺は警察官だからな」

中村の機体の破片は白煙を纏^{まと}いながら落下していった。

タワー・前

「あなたを死なせはしませんよ！」

林田の両脇には屈強な男が2人、サブマシンガンを構えて立っていた。

周囲にいた熊達は一瞬で崩れてしまった。

「すまない、助かった」

林田は男から銃を受け取りながらお礼をした。

「あなただけ置いていかれたのですか？」

SATの隊長、畑山が言った。

「あえて残ったんですよ」

「置いていかれたんだろ？」

機動隊の隊長、芳川が言った。

「相変わらず冷たいですね、芳川先輩」

「隊長と呼べ」

「話しはそこまでだ、来るぞ！」

畑山は襲い来る熊達の額を正確に貫いていった。

「腕は落ちてないだろうな！？」

芳川も畑山同様に熊を倒していく。

「ケルベロスの名前をくれたその目は今じゃ節穴ですか？」

林田は2人よりもさらに正確に、さらに素早く熊を消していった。

「やりますね、警視正殿」

畑山は熊の集団に手榴弾を投げ込みながら言った。

「そんないいものがあるなら最初から……」

林田の声は爆音にかき消されてしまった。

「この調子で殲滅せんめつするぞ！」

芳川も手榴弾を投げていた。

「……っ！！上！！」

林田が爆音が別にもしたのに気づいた時には、中村の機体の破片は既に近くまで来ていた。

「くそがあー！！」

畑山は手榴弾を降って来る破片のほうへ投げ、それを腰にさしていた拳銃で打ち抜いた。

「ぐあっ！？」

爆風で林田と芳川は数メートル転がった。

「くっ、無茶しやがって……畑山隊長、大丈夫ですか！？」

芳川はすぐに起き上がって畑山を探した。

（パン！　パン！）

「ぐあああー！ー！！」

銃声の直後、畑山の悲鳴が辺りに響いた。

「畑山隊長！？」

吉川と次いで起き上がった林田は声がしたほうへ急いだ。

爆煙が晴れると、胸から2箇所、血を流して横たわる畑山の遺体があった。

「そんな……一体誰が！？」

「私ですよ」

芳川の問いに答えるように犯人が姿を現した。

「……山崎！！」

林田は躊躇なく引き金を引いた。

「そう慌てるなっ」

黒いマントを羽織る山崎は軽々とサブマシンガンの雨をかわした。

「私が生きていたことには驚かないんだな」

「お前が簡単に死ぬような奴かよ！　まあ、他の奴なら驚いただらうよ」

「やはり油断できない男だね、君は……。だからこそ私が君を殺りに来た」

山崎の左手には、林田にも芳川にも見覚えの無い銃が握られていた。

「試し撃ちは済んでる。どこからでもきたまえ」

山先は両手を広げて挑発した。

「調子に乗るなよ！」

「無闇に突っ込むな！！」

興奮した林田を抑えたのは芳川だった。

「状況はどうあれ畑山隊長を倒した実力だぞ、それにあの謎の銃だ」

「……そうですね」

2人は素早く距離を取ってヘリの残骸に身を潜めた。

「そんなところへ逃げても無駄ですよ」

（パン！）

さっきと同じ乾いた安物の銃声。でもその弾道だけはおかしかった。

「ぐっ！？」

「先輩！？」

銃弾は残骸を貫通して芳川の左肩を貫いた。

「この銃は私達がアメリカ力で開発した特別製でね。厚さ30cmの防弾ガラスを軽く突き抜ける威力を持っているんですよ。だからそんなところに隠れたって……」

山崎は近づいてきながら言った。

「無駄なんだよ！」

（パン！ パン！）

「くそっ！」

林田は芳川を抱えながら走った。

「まったくつまらないな……」

（パン！ …… ダアアン！！）

5発目に放たれた弾丸は2人の足元で炸裂した。

「ぐあああ！？」

痛みと爆風で倒れる2人。

（ズガガガ！！）

林田は倒れたまま引き金を引いた。

しかしやはり山崎は難なくかわしてしまった。

「詰みだ、林田警視正」

山崎は狙いを林田の額に向けた。

（パン！）

「まだだ！」

林田は芳川に突き飛ばされて銃弾を免れたが、代わりに芳川の右腹部が貫かれた。

「芳川先輩！？」

「林田……後は任せたぞ」

その言葉を残して芳川は山崎へと走り出した。

「仕方ないですね、あなたから殺してあげますよ！」

「なめるな！」

手負いのはずの芳川だが、山崎からの銃弾を走る速度を落とさずに避けていた。

「これが……機動隊隊長の覚悟だ!!」

山崎に抱きついた芳川の懐には栓の外された手榴弾があった。

「くそがああー!!!!!!」

「せんばああー!!!!!!」

(ドゴオオオー!!!!!!)

「ハア、ハア……この私が、こんなところで……死ぬものか!!」
爆煙の中で山崎はまだ生きていた。

しかし全身を火傷が襲い、左腕はどこかへ吹き飛んでしまった。

「ヤマサキイイー!!!!!!」

ふらつく山崎の目の前には瞳から涙を流しながら銃を向ける林田がいた。

(ズガガガガガガガ!!!!)

銃口からは無数の銃弾が溢れ出し、その全てが山崎の身体を突き抜けていった。

「撃たれたから撃って……撃ったから撃たれて……俺達がしていることは、戦争じゃないか……」

林田は自分の非力さに打ちひしがれ、座り込んだ。

タワー・大展望台1階

「真っ暗ですね」

聖夜は辺りに警戒しながら静かに先頭を歩いた。

「ここには誰もいなさそうね」

梢は2階への階段に向かっていた。彼女も1人の母親、やはり息子の優太が心配なのだ。

「……………」

「高羽警視？」

怖い顔でフロアの奥を見つめる高羽に拳次が声をかけた。

「すまない、先に行つてくれるか？」

「……………はい、分かりました」

聖夜達は足音を立てないように2階へと上つて行つた。

「……………それで隠れているつもりか？」

「さすがね、それでも気配は消していたんだけどね」

高羽の視線の先の暗闇から女の声がした。アイルに似た声なのは、彼女の妹だからだ。

「私はフィリス。よろしくね、ファントムさん」

姿を現したフィリスは腰までいく長い黒髪を真つ直ぐに下ろし、全身を黒いバトルスーツで包まれていた。

「俺は女でも容赦しないぜ」

高羽はデザートイーグルの銃口を彼女に向けた。

「そんなオモチャじゃ私は殺せないわよ」

フィリスは右手を前に出して人差し指を横に数回振つた。

「試してみる？」

フィリスは意地悪そうに微笑んだ。

「試されてやるよ」

高羽は躊躇い無く引き金を引いた。

（ズガンッ！！）

17 匹目 光戦 - 造られた雷 -

「……マジかよ」

高羽の放った銃弾はフィリスの足下に転がっている。

「どうかしら？」

彼女は銃弾を広い上げながら言った。

「ちっ！」

今度は3回引き金を引いた。

「無駄よ」

銃弾は先ほど同様、彼女の周囲に発生した青白い電流によって動きを止められた。

「オモチャはしまいなさい」

彼女は空中に漂う銃弾を右手で摘んでは左の掌に乗せていく。

「どんな手品だ？」

高羽はデザートイーグルを放り投げ、闇のように黒い拳銃、黒い幻を握った。

「手品じゃないわ。これが私の……能力よ！」
ちから

銃弾は青白い電流に絡み付かれて宙に浮き、高羽目がけて一直線に飛んで行った。

「甘いぜ！」

4発の銃弾は黒い拳銃の銃身に弾き跳ばされた。

「……なるほど、それが噂に聞いた黒き幻ね」

始めこそ驚いた顔を見せたフィリスだが、すぐに高羽の拳銃が異質なことに気付いた。

「お前の相手をするのが俺でよかった」

「どういう意味かしら？」

「すぐに分かるさ！」

高羽は拳銃を構えないまま彼女の方へ走りだした。

「黒焦げにしてやる！」

彼女が右手を突き出すと電流は呼応するように高羽へ襲い掛かった。

高羽は襲いくる雷の槍を銃身で切り裂きながら進んでいく。

「何なのよその銃は！？」

フィリスは顔を歪めながら左手も使って電撃を操った。

龍、斧、矢、剣など様々に形作られた雷は高羽を全方位から襲うが、彼の動きは悠然と漂う霊のごとく全く止まらない。

彼女が両手を床につけると電流はフロア中に伝わり青白い光が空間を支配した。

「消しとびなさい！！」

黒く霞む視界、焦げ臭い悪臭、ひび割れた壁と床……。

彼女は物影に隠れ、呼吸を整えながら冷静さを取り戻していく。

「ずいぶんと派手にやってくれるなー」

沈黙を破ったのは高羽の声だ。

「さっき言った言葉の意味が分かっただろ？ ……俺にお前の電撃は効かない」

高羽は辺りを見回すがフィリスの姿は見当たらない。変わりに視界に入ってきたのは青白い光。

高羽は避けることなくその電撃を全身に浴びた。

「無駄だったの」

電撃は手懷けられたかのように激しさを失い、すぐに身体の奥に染み込んでいった。

「ど、どういう……」

「そこか！」

高羽は声のしたほうに銃口を向けて引き金を引いた。黒い拳銃から放たれたのは銃弾でなければクラッカーでも万国旗でもない。

” 光 ”

全てを飲み込むかのような暗黒の光だ。

一筋の光はフィリスが隠れている瓦礫の目前で拡散し、辺りを綺麗に吹き飛ばした。

「あなたは……何者なの……？」

自分と同じ能力を持った人間を目の当たりにし、彼女は呆然としていた。

「昔話は好きじゃねーんだが……お前が大人しく捕まってくれんなら話してやるよ」

高羽は依然としてその銃口を彼女に向けている。身体からはほのかに黒い電流がまとわるように漏れていた。

「な、何言ってるの？ あんたの電撃だって私には……」

言い終わる前に黒い拳銃から再び光が放たれた。

先ほどのようにフィリスの目の前で拡散した光は彼女をドーム状に包み、発生した強力な力場が彼女の皮膚を焼いていった。

「っーーーーー!!!!？」

痛みが全身を支配し、謎に脳を埋め尽くされた彼女の口は開け放たれるが叫びは声にならなかった。

「お前がどうやって電気を操れるようになったかは知らないが、俺の黒い雷は青い電撃程度じゃ防げないぜ」

「どういう……意味よ？」

うつ伏せに倒れたフィリスは首だけを高羽に向けた。

「……何も知らないなら教えてやろう」

高羽は銃口の真下に彼女の頭がくるまでゆっくりと歩いていった。

……人間に限らず、生き物は外界から刺激を受けたり物事を考える時、神経にほんのわずかな電気が流れる。

だがその昔、その電気が強過ぎる人間が生まれてしまった。

まだ植民地だったその国の政府は秘密裏にその人間を調べ尽くし、実験に実験を重ねた。

その結果、体内を流れる電気を増幅し、かつ操ることができる人間を造ることに成功したんだ。

そして植民地だったその国は雷の力を武器に、巨額の富を気付いていった。

だが、そんな電気を操る人間達も心は普通の人間と同じ。なぜ自分達は電気を操れるのか、なぜ他の人間を殺さなければならぬのか。出生の秘密を知った彼らはその国を滅ぼし、研究資料や実験結果などをその能力で全て燃やし尽くした。

彼らは彼ら自身で自分達を歴史から消したんだ。

彼らの電気には種類がある。

黄色い電気を操る者がほとんどだったが、極稀に違う色が存在したらしい。

電撃自体の威力は低いが物体に絡みつくことでその動きを支配する青い雷。

物体を破壊することに長けた青よりも強い赤い雷。

電撃によって発生する磁場や衝撃を駆使する赤よりも強い黒い雷……。

「何であなたがそんなこと知ってるのよ!？」

フィリスは起き上がろうとしたが高羽がそれを許さない。

銃口をこめかみに突き刺して頭を床に押し戻した。さらに右足で背中を抑えつけたら彼女に打つ手はない。

「俺は「破壊用アーティファクト・作品No.086」。大昔に造られた86番目の兵器だ」

ガラスが割れた窓枠からは初夏の夜風が吹き込み、2人の男女の頬を嘲笑うかのように撫でていった。

床に伏したままの女は横目で男を見上げた。

長めの黒い前髪の奥に潜む切れ長の目。その瞳はどこか寂しげに細められている。

「……私も」

男の銃口によって頭を、右足で背中を床に押し付けられたままの女は視線を逸らしながら口を開いた。

「私も……造られた人間なの……」

女はゆっくり瞳を閉じ、少し間を置いてからこう言った。

「私は『迎撃用アーティファクト・作品No.297』!」

フィリスは高羽の一瞬の隙について銃と右足をはねのけて距離をとった。

「お前がしたいことは何だ? 何が目的なんだ?」

高羽は銃を構えないままゆっくりと近づいていく。

「黙れ!! 私……私は生まれてきてはならなかった存在なんだ!」

錯乱した彼女の周囲はスパークし、青白い電流はむやみやたらに物を壊していった。

「そんなことはない。だってお前は生きてる。他の人間と同じように自分で考えて、自分で決めて……生きてる!」

高羽は真っ直ぐに彼女を見つめる。優しくもそれでいて力強い目だ。

すると青白い電流は引き寄せられるかのように高羽だけに向かっていった。

「お前の苦しみ……俺にぶつけてこい!!」

銃口から走る黒い閃光は彼女の苦しみを打ち破っていく。

激突する雷達が激しい雷鳴を上げながら、スパークは連鎖しながら辺り一体を包んでいった。

「違う!! 私……私……!!」

目の縁に溜まっていく涙の粒は流れては溜まり、溢れては湧き出る。

「もういいんだ」

高羽はフィリスをしつかりと抱き締めた。

「俺達は寿命が長い。やり直す時間だろうと、償う時間だろうと、いくらでもあるんだ」

高羽は背中にして回していた手で優しく彼女の頭を撫でてやった。

その時だった。

「うつ、ひつぐ、ふうつ、うう、ああああ!!」

張り詰めた糸が切れたかのように彼女は泣き崩れ、夜空に轟く雷鳴は悲鳴となる。

(ピキキ)

暴れ唸っていた雷は灰色の煙だけを残して消えていた。

(ゴゴゴゴゴ)

変わりに2人が立っていた床が轟音を立てて崩落していった。

「……う、うう」

薄らと開かれたフィリスの瞳には綺麗な夜景が一面と広がっている。

「……くうっ!」

高羽は左手でフィリスの右手を掴み、右手で断崖と化した床を掴んでいる。

「高羽警視……」

彼女は顔を上げると初めて笑顔を浮かべた。

「最後にあなたと会えて良かった……。大丈夫、死ぬのは私だけで十分よ」

頬を薄く桜色に染めた彼女は高羽と繋がれた手を振りほどき。

「さよなら……」

今までのような刺々しさが無くなった青白い電流は高羽の身体を包んでフロアの中へと追いやった。

「これでいい……これで」 仰向けに落下していく身体。閉ざされたまぶたの間からは大粒の滴が飛び立っていく。

「逃げるな!」

彼女ははつと横を向いた。耳元から聞こえた声は高羽のものだった。

「生きて戦え!!」

再び高羽はフィリスを抱き締めた。さっきより強く、さっきよりしつかり、さっきより優しく。

そして2人は闇の中へ溶けていった……。

17 匹目 光戦 - 造られた雷 - (後書き)

どうしても最近読んだ小説や見たアニメに感化されてしまう(笑)
今回もそう。

電撃を使っつてのはもとの設定だったんだけど、ちとやりすぎ
たwww

さて、次回は展望台2階での戦いです！
ついにその实力を見せる陽気な化学者！
叙々に明かされ始めた謎！

戦士達を待つ未来とは ！？

18 匹目 墮人 - 沈みゆく光 - (前書き)

墮人^{だじん}：人から墮ちた者をさす
ルキの造語

18 匹目 墮人 - 沈みゆく光 -

タワー・大展望台2階

「下じゃ凄い戦いをしているみたいだね」

1階からの振動が足に響き、白衣の男は上機嫌で言った。

「君ももう少し楽しませてくれよ」

白衣の男は四つんばいで倒れる井川を冷たい視線で見下ろした。

「この手品ヤローが……」

井川は火傷を負った左腕を押さえながら立ち上がった。

先ほど、謎の薬品が合わさった液体を肘と手首の間あたりにかぶってしまったのだ。

「あつはは、化学と言ってくれたまえよ！」

両者の間には少し距離があるが、男は再び薬品を調合しだした。

白衣の内側からエメラルドの液体の入った試験管を取り出し、持っていた固形物質の入ったビーカーに少量注いだ。

「さーて、何が起きるかなー？」

卑下にあつ男の言葉に井川は生唾を呑んだ。

「……ボンッ!!」

ビーカーの内部では小さな爆発が起き、覗き込んでいた男の顔を黒煙が包んだ。

「（……チャンス!）」

実験は失敗したと判断した井川は大型のナイフを取り出して男に投げた。

「くふふ……失敗は成功の母なのだよ」

男はさらにワインレッドの液体を加えていて、ビーカーの中では混沌の輝きを放っていた。

それを傾けた途端、井川はダンプカーに激突されたかのような衝

撃を受けて後方の壁にめり込んだ。と同時に、左肩に独特の鋭い痛みを感じる。

「くっ……」

男に投げられたナイフは実験による衝撃波のようなもので押し戻され、その刀身が投げた当人に突き刺さったのだ。

井川は痛みを堪えながらナイフを引き抜き、ふらふらと立ち上がった。

「そういえばまだ僕の名前を覚えていなかったね」

男は余裕の表情を浮かべ、近くの壁をじろじろ見ながら続けた。

「僕はYamazaki、皆からはドクターと呼ばれている」

Yamazakiは白衣の襟ひ少し引っ張りながら医者だということ強調した。

「お前が……ドクター？」

井川の左手の指先からは血が滴り、床には赤い水溜まりが広がっていく。

「そうとも！　ただし、怪我を治すのが仕事じゃない。人を造るのが仕事さ」

Yamazakiは右手の人差し指をピンと立て、表情だけ笑いながらさらに続ける。

「アイル……君達にはRileyと言ったほうが分かるかな？　彼女と彼女の妹、さらに山崎警視正殿を造ったのはこの私さ！　ある人の拷問という名の命を受けてね！！」

叫ぶYamazakiの顔は声が大きくなるにつれ、化け物じみたように崩れていった。

「ある……人？」

井川の額からは嫌な汗がじつとりと流れていく。痛みで視界は揺れている。

「僕を含め、造られた4人はその人の命令によって色んなことをしてきた。数え切れないほどの人間を殺してきた。……そして僕は決めた、もう終わりにしようって。その人を殺して僕達も死のうっ

てね！」

Yamazakiはマントをなびかせるかのように白衣を開くと、内ポケットにはいくつもの試験管がささっていた。

「だがその前に邪魔をする君達を殺す！」

指先で掴んだ試験管の1つには虹色に輝く液体が入っている。

「まさか……その人って!!」

1機のヘリが突っ込んできて、言葉は効果音のごとくかき消された。

2人はヘリからも相手からも距離を取って物陰に身を潜める。

プロペラは衝撃で吹き飛び、機体から漏れる黒煙は夜空に消えていく。

そんな絵を背景にして、降り立った2人の男女は静かに銃を構える。

「どんな理由があろうとテロを正当化などさせない」

全身に巻かれた包帯が痛々しい女性……、揺れる黒髪のポニーテールは彼女の幼い頃からのこだわりでもある。

西川里奈……死の淵より舞い戻ってきた女だ。

「こんなことはもう終わりにさせる」

長身にがっしりした肩幅、黒い瞳には決意の火が灯っている。

河浦竜一……まもなく熊に豹変する可能性を持っている男だ。

「次から次と面倒な……っ!？」

Yamazakiが右手に持っていた試験管は粉々に割れ散った。

「私の銃の腕の評価は、特Aだ」

西川の持つ拳銃の銃口からはかすかな白煙が昇っている。

「まったく……ゴミ共があ!!」

血走った眼を見開いたYamazakiは1本の試験管の中で揺れる紫色の液体を飲み干し、白衣を脱ぎ捨て、声を上げて笑いだした。

「くっくく……ははっ、あははっ、ひゃーっはっはっはっ……!!」

細身だったはずの身体は筋肉の鎧に包まれ、全身で血管と神経が浮き出る。

”陽気”といった初めの印象は微塵も残さずに消え去ってしまった。

「そうだ、ゴチャゴチャ言っても無駄だったなあ！ 結局、生き残ったほうが正義！ 一つの世も強い者の言葉が全てえ！」

床にヒビを入れながら駆けるYamazakiに、刑事3人の銃弾はかすりもしない。

「まずは貴様だニシカワアアアー！！」
握りしめられた化け物の拳には悪意に満ちたオーラが絡み付いている。

「西川警視正！！」

井川は彼女を突き飛ばして身代わりとなった。

拳は腹へもろに入り、口からは血と胃液の混ざったものが零れ、床と平行に吹き飛んで柱を砕いて止まった。

意識が飛ぶほどの威力と衝撃で肋骨数本が粉々、胃と右の腎臓破裂、左肩脱臼となった。

すかさず河浦は銃を発射するが虚しく空を切って終わった。

「大丈夫か井川！？」

河浦の呼び掛けに返事の声はなかった。

「よくもーっ！！」

西川は銃を乱射しだが、残像が見えるほどの速さで動く化け物は難なく彼女と距離を詰めた。

そして振り回された右の掌は彼女の背中を捕らえ、やはり床と平行に突き飛ばされてしまった。

床に落ちた衝撃で右腕からは筋が千切れる音がした。

「あゝ ああっ！！」

全身を酷い痛みが襲い、いつそ気絶してしまいたい思いが過りながら彼女の悲鳴は河浦に届く。

「くっ！！」

人間の常識を外れた化け物を前に、河浦は恐怖で脚を震わせた。
いや、震えてしまった。

（ドクンッ）

「やはりこんなものか……」

化け物は一瞬、ほんの一瞬だけ寂しそうな顔を見せた。

（ドクンッ！）

「……死ね」

より一層強く作られた握りこぶしからまがましいオーラが放たれ、一歩一歩河浦へと歩み寄って行く。

（ドクンッ！！）

「……っ！？」

その時は突然やってきた。

「あっ……ぐうお！？」

河浦は胸を押さえながら膝をつく。血走った眼の瞳孔は不規則に揺れる。

徐々に浮き出る血管、鋭利に伸びる爪、毛深くなっていく身体と不自然に盛り上がる筋肉。

「くつくつく、君も僕のように熊になるんだな」

Yamazakiは右手を河浦へと伸ばす。まるで自分の仲間へと受け入れるかのように。

「俺は……ああああ……！」

天空へ猛る咆哮と共に、河浦は熊へと変貌してしまった。

「ふふふっ」

Yamazakiは小枝ほどの銀色の笛を取り出すとそつと息を吹き込む。

普通の人間の耳では聞きとれないほどに高い音は熊の耳へと流れていった。

「ぐうう」

その音による指示によって熊は大人しくなってしまった。

「その女を……西川を食い殺せ」

飼い主は餌を指差して熊に命令した。

「……か、河浦」

口から血を流しながら横たわる彼女は霞む視界に熊を見た。

「ガアアアアア！！」

ナイフのように尖った爪を立て、熊は右腕を鋭く彼女へと伸ばしていった。

爆発音のような低い衝撃音が響き、砂埃が巻き上がる。

「はーっはっはっは！！ 傑作だなあ！！ テメエの手で上司を殺しちまうんだからなあ！！」

飼い主の卑劣な笑い声だけが轟く。

「はーっはっはっ……は？」

19 匹目 銃火 ・ ヒトとして ・ (前書き)

明けましておめでとございます／(^ O ^)
今年もルキをよろしく

19 匹目 銃火 - ヒトとして -

しかし飼い主は気付く。砂埃に写るシルエットには巨体が1つ。その巨体は小柄な影を抱き上げていた。

「バカなっ!? 笛の支配を無視したというのか!？」

視界が晴れると、熊はそこにいなかった。

「河浦……なのか？」

熊は西川をこれから始める戦いに巻き込まないよう離れたところに寝かせた。

「……………」

人の言葉がまだ話せるのか、もう話せないのかは分からないが、熊は黙ったままその場を去った。

彼女の横には気を失ったままの井川もいた。

「河浦……死ぬなよ」

その言葉に熊は一瞬だけ動きを止める。がすぐに Yamazaki のもとへ歩いていつてしまった。

「なるほど……あくまでも警察としてこの僕を倒すつもりなんだな」
俯いたままで表情の分からない不気味な河浦に対し、Yamazaki の右腕には気を凝縮させたオーラが集まっていく。

「……………!」

一度大きな深呼吸をした河浦はゆったりとその瞳を開いた。
決意を失った、生気のない闇に落ちたような瞳だ。

Yamazaki がその瞳を見たのは一瞬だった。河浦の身体は煙のように消えて、代わりに左頬を強烈な衝撃が襲った。

状況を理解する前にさらに3発ほどの衝撃が身体を貫く。

「ギ……ギザマア!!」

左手で鼻血を押さえるYamazakiは追撃してきた河浦に渾身のカウンターをお見舞いする。

混沌のオーラは花開くかのように広がり、河浦は腹で鈍い音を奏でながら返り討ちにあった。

「グオオオオオオ！！」

「ハアアアアア！！」

宙を舞う血潮と咆哮。

人を超えた……いや、人から堕ちた熊2匹は互いの拳を交互にぶつけていった。

「はあ……はあ……河浦」

激痛に耐えながら目を覚ました井川は壁に寄り掛かるように立ち上がる。

「グルウウウ……！！」

ただの殴り合いとなった戦いの最中、河浦と井川の目が合った。

見た目は完璧な熊となつてしまつたが、井川はその瞳から何かを感じ取り、拾い上げた拳銃を静かに構えた。

「ゴオオオオオ！！！！」

河浦はYamazakiの身体にしがみ付くと、そのままほぼ大破しているヘリへと突っ込んだ。

「何を……っ！？」

Yamazakiの視線の先には井川がいる。脚も腕も震えているが照準だけはしっかりと定まっていた……ヘリのエンジンへ。

「や、やめろおおお……！！！！」

「撃て……井川……！！！！」

血が滲む口から発せられた言葉を最後に、河浦はYamazakiもろともヘリの爆発に吞まれ、地上へ堕ちていった……。

「……うう」

井川はその場に崩れ、横向きに倒れながら泣いた。

身体の痛みなんかよりも、もっと大きな傷を抱えてしまったのだ。

「……井川」

西川は床を這いつくばるようにして井川の横まで辿り着いた。

「俺は……友をこの手で……うああああああ……」

……」

タワー・特別展望台

大展望台から続くエスカレーター、エレベーターを乗り継ぎ、聖夜と梢は東京タワーの特別展望台の入り口に立っている。

「……梢？」

聖夜は眼下に広がる夜景に目をやりながらそつと呟いた。

「なーに？」

風になびく髪を手で優しく押さえながら梢は聖夜の横顔をじっと見ている。

「この戦いが全部終わったら……また一緒に暮らそう」

「……ふふ、当たり前でしょ……家族なんだから」

かすかに紅潮した夫の頬を、妻は気付かないふりをしながらその大きな背中に額を当てた。

「……行くか」

胸を駆ける衝動を抑え込み、聖夜は梢の半歩先を歩きながら中へ入っていった。

そこには射し込んだ月の光以外明かりはなく、2人の足音以外に音はない。

「フィリス!？」

聖夜は先の見えない暗闇へ声を投げた。

「……ようこそ、小口聖夜巡查長、小口梢元隊長」

冷たい声と一歩ずつ大きくなる足音の方へ2人は銃口を向ける。

重苦しい雰囲気にも包まれた空間で聖夜の頬を汗が伝った。

「銃を下ろしてくれる？」

月光に照らされた彼女は丸腰なのをアピールするように両手を挙げている。

「優太と警視總監はどこだ！？」

聖夜は口調を強めながら銃をしっかりと握り直した。

「息子さんなら今ごろ御自宅の布団の中よ」

彼女は悪意の欠片も感じられない笑顔を見せた。

「どうということ……？」

テロリストの言葉を信じられない梢は一層険しい顔になった。

「私達のターゲットは警視總監。だからあなた達の子供を傷つけるつもりは最初からなかったのよ」

彼女は手を下げるとゆっくりと窓際へ歩いて行く。

自分を照らす月を眺めながら言葉が続けた。

「私達が警視總監をすぐに殺さずわざわざこんなところへ連れてきたのには理由があるの。子供と一緒に連れてきたのはより注目を集めるためよ」

「お前なんかの言葉を信じろっていうのか？」

2人は彼女の後ろに回り込んで銃口を後頭部につけた。

「私達はね……ただ、私達のことを知って欲しかっただけなの」

窓ガラスに映る彼女の目からは一筋の雫が零れた。

「私達は……造られたの」

彼女は俯きながら再び歩きだす。

後を追う2人はその背中から悲しみを感じとった。

「造られた存在なのよ……」

20匹目 漏洩 - 悲しみの果てに -

今から15年前、仕事一筋で生きてきたある男の愛娘は8年という短い生涯を終えた。

死因は轢き逃げによる即死。

男は刑事でありながら被害者の家族ということで捜査から外され、娘の仇を討つことなく犯人はすぐに捕まった。

その事件を切っ掛けに、男の妻は息子を連れて家を飛び出してしまった。

全てを失った男は怒りに狂う間もなく、悲しみに暮れたまま唯一残された道を進むしかなかった。

男は何かに取り憑かれたかのように仕事をこなし、出世街道をひた走ったのだ。

2年後、男が40歳の頃だ。ある仕事でアメリカに行った時、歯車は回り初めてしまう。

仕事先の相手とやけに気が合い、バーで酒を交わしている時だ。その日はお互いにいつも以上に飲んでしまい完全に酔っ払ってしまっていた。

そして仕事相手の男、天王寺総一は言った。

「俺は衛星以外にもう1つ秘密の仕事をしているんだよ！」

日本人だというのも仲が良くなった理由の1つだろう。

「実はな……人間を造っているんだ」

後日、男は記憶の端にかろうじて残っていたことを武器に天王寺に詰め寄った。

天王寺は諦めて男を研究施設へと案内する。

「……素晴らしい」

男は並べられた試験管や、その中の胎児のような物体や、施設内の全てのものに目を輝かせている。

詳しい説明を聞いた男は覚悟を決めたようにこう言う。

「私が日本の裏金をここへ援助しよう」

もちろんそれが表沙汰になることは一切ない。

男と天王寺は固い握手を交わし、研究は目まぐるしい速度で進歩していった。

5年後、男が立ち会いの下、第1世代と呼べるほどの作品が2人完成された。

1人はYamazakiと名付けられた若い男性だ。

Yamazakiは頭脳に特化されたタイプで、研究所の誰もが彼には及ばなかった。

その頭脳を活用すべく、Yamazakiは研究グループの1人として3人の第2世代を完成させた。

1人は限りなく人間に近付けて造られた若い女性……私。

名前はグループのリーダーだった天王寺をそのまま受け継いだ。

1人は電気的能力を操れたと言われる大昔の存在を真似て造られ、私の妹として誕生した。

ここで私達を区別するために私は天王寺アイル、妹は天王寺フィリスと新たに名付けられた。

もう1人は身体能力に特化されたタイプで少し中年の男性、山崎。彼は男に引き取られ刑事として日本に潜伏。

そして第1世代のもう1人……男は彼も引き取り、自らの直属の部下とした。

……そう、彼は田沼和也警視長よ。

その後、私達5人は男を通しての日本からの援助のお返しとして、男の命令を受けて男が邪魔と判断した存在を殺してきた。

第2世代完成から5年、男は念願だった警察のトップ、警視総監

となった。

「もう分かるでしょ？ その男が中矢温志よ」

アイルはなおも敵意を見せずに佇んでいる。

「な、なぜお前らは警視総監を狙う！？」

現実離れし過ぎた話に理解が追いつかないが、聖夜はとりあえず疑問に思ったことを述べた。

「こんな生き方が嫌だからよ」

彼女の心からの声に2人は意表を衝かれた。

にも関わらず彼女はやはり抵抗する素振りを見せない。

「人を殺すことを当たり前に感じてしまう自分達が嫌だからよ。だから全てを終わらせるために中矢のした罪を暴き、あなた達に殺される道を選んだの」

そこで梢は気付いた。自分達が東京タワーの外にいる時、アイルは何かしらの装置で自分の声を発信していた。

それと同じことを今もしていたら……。

「でも、一番許せなかったことは別にあるの。中矢が危険も顧みずに裏金を注いだ理由……それは自分の娘を造ること。私がなぜ何の能力も持たず、何にも特化していないか。それは私が中矢の娘を造り出すための実験台だったからなのよ！」

アイルは瞳から大粒の涙を流しながら続ける。

「でもこれで作戦は成功。協力してくれた山崎の部下の大杉が田沼に殺されたのは計算外だったけど……」

「大杉警視がお前らの仲間！？」

聖夜はたまらず口を挟む。

「あなた達の動きを逐一教えてくれたわよ」

彼女は後ろを向いて再びゆっくりと歩きだした。

「それで、警視総監はどこ？」

梢は銃口を彼女の後頭部から逸らすことなく後を追う。

「残念ながらここにはいないわ。ついさっきヘリで現れた田沼に連

れて行かれたの」

「そんな……」

梢は銃を下ろし、聖夜も銃を下ろそうかと思ったその時。

「だからこれで……私の役目も終わりよ！」

アイルは振り向きざまに懷から拳銃を抜いてその矛先を梢に向けた。

刹那、静寂を破って発せられた2つの銃声。

しかし、床にひれ伏しているのはアイルだけだ。

「どういう……？」

聖夜の銃口からは薄らと白煙が上り、アイルの拳銃は空砲だった。

「言った……はずよ……殺される……道を……選んだ……と……」

それを最後に、アイルの首は力なく傾いた。その瞳を開いたまま。左胸を貫かれ、貫通した背中から溢れる血が彼女の戦いの終わりを意味していた。

「こんな結末って……」

言葉の続きを言うことなく梢は聖夜に支えられながら、2人はその場を後にする

21 匹目 遠音 ・クマさんと鬼じっし・

2ヶ月後

警視庁食堂

「それでは、西川警視長と井川巡查”部”長の退院を祝って、わたくし小口巡查部長が乾杯の音頭をとらせていただきます、乾杯！」
掲げられたグラス達はお互いに高い響きを鳴らし合う。

普段から緊張の絶えない刑事達の顔からはこんな小さな宴会でも十分だと言わんばかりに笑みが零れている。

「全く、お前らこんなことしてて仕事は大丈夫なのか？」

主役の1人、西川は笑いながら言う。

「警察は暇が一番ですよ」

わざわざ京都からやってきた顔の恐い林田警視正も今だけは笑顔だ。

「にしても、結局事件はやつらの筋書き通りか……」

西川と聖夜は一瞬目が合う。

今回の事件のリーダー格、天王寺アイルとの最後の接触者だからだ。

聖夜の隣ではすっかり場に馴染んだ梢がいる。

「5人の犯人のうち、4人が死亡で1人が高羽と共に行方不明。スパイだった大杉は田沼に殺害され、その田沼は高尾山で炎上したへりの中から中矢警視總監と共に遺体で発見……か」

西川はそこでお茶をすする。

いつ事件が起こるか分からないので今日はアルコールは用意されていない。

「まさか山崎警視長だけじゃなく、田沼警視正に大杉警視もやつらと繋がっていたなんて……」

井川は手術の結果、半分となってしまった胃の部分を擦りながら言った。

「でも何かまだ忘れてることがあるような……んー」

聖夜は腕を組みながら考えるが何も出てこない。

「とりあえず今は飲もうじゃないか」

林田は麦茶のビンを聖夜のグラスに傾ける。

「そうですね、ありがとうございます」

グラスに並々と注がれていく時、署内にスピーカーで声が轟いた。「都内全域で暴れまわる民間人が多数出没！ 共通する特徴は耳が獣のように尖り、血管が浮き出て目は釣り上がって正気を失っているとのことです！ 署内にいる警官はただちに……」

スピーカー音を遮って彼女は声を上げる。

「行くぞお前ら！！」

西川は林田と梢に礼をして走って行った。

その後を追う部下の顔は凜々しい刑事のそれになっている。

「そうだよ、熊のことを忘れてたんだよ！」

聖夜は頭のモヤモヤが晴れたようにスッキリした顔つきになった。そしてどこか無邪気な表情に変わっていく。

まるで、クマさんと鬼ごっこでもしに行くかのような顔に。

f i n

＊＊匹目 裏話 - 闇へ続く鬼ごっこ -

7月7日

東京タワー

速度をぐんぐん上げて2人は落下を続ける。

高羽はフィリスをしっかりと抱き締め、フィリスも高羽にしっかりと抱きついている。

「力を貸してくれ!!」

高羽は彼女の手を握る。

彼女は小さく頷き、結ばれた両手は近づいてくる地面に向けられた。

「こんなところで……」

「私はまだ……」

「死ねない!!!!!!」

混ざり合う雷は銀翼の羽となって2人をゆっくりと地上に降り立たせた。

「……」

「……」

「……………行くか」

気まずい雰囲気の中、高羽の言葉を合図に闇に消えいく2人。頬を赤らめ、歩幅を合わせ、その手をしっかりと繋いだまま

タワー・特別展望台

「やはり来たのね、田沼!」

アイルはホバリングしたヘリから顔を覗かせる田沼に叫ぶ。
叫ぶ、と言ってもその言葉に感情はこもっていない。

「中矢を渡してもらおう」

田沼はヘリのドアをスライドさせ、サブマシンガンを構える。

「それは警察官として？ それとも、造られた者として？」

アイルは眠ったまま紐で縛られている中矢を引きずりながら言った。

「……」

田沼は無言のまま銃を構え続ける。

「まあ、どちらでもいいわね。私の役目はここで全てを告げること。こいつはあなたの好きにして」

アイルは中矢を軽々と抱え上げ、ヘリの中へと放り投げた。

「……いいのか？」

田沼は寂しそうにアイルを見つめる。

「覚悟は出来てるわ」

アイルは懷から拳銃を取り出し、銃弾を床に捨ててから懷に戻した。

「これであなたと会うこともないわね」

乱れる髪は右手で押さえられ、そこから覗かせる瞳には優しささえ感じとれる。

「……そうだな」

田沼は中矢を後部座席に座らせながら言う。

「……ばーか！」

アイルは目一杯の笑顔でそう言う中に戻って行く。

電気がついていないせいでその姿はすぐに闇と一体化した。

「ばーか……か」

田沼はアイルの言葉を呟き、操縦桿を握った。

ゆっくりと上空を漂う黒い機体。

眼下には高尾山の木々が手招きするようにうつそうと茂っている。

「んゝー！ー！！？」

田沼は後ろからの声にゆっくり振り向いた。
口をガムテープで塞がれた中矢が暴れているが、紐で縛られているせいでたいして動けないようだ。

「……」

田沼はしばし考えを巡らせ、その思考は1つの結末へと辿り着いた。

「あんたが俺をこの世に産み出してくれたなら、俺もあんたにお返ししなきゃな」

田沼はにやり、と卑下な笑みを浮かべ操縦桿を奥へ倒す。

「どうやらすぐに会えそうだな……アイル」

7月8日

時刻はちょうど日付をまたいだところ。

「西川さん、大丈夫ですか？」

「井川、もう少しだからな」

特別展望台から下りた聖夜と梢は、大展望台2階に倒れていた2人を担いでエレベーターで下っている。

「やつら……は？」

西川は必死に言葉を口にする。

その一言一言と共に口から血が跳ねる。

「……死にました」

そう答える聖夜に担がれた井川は既に意識を手放している。

西川は俯いてそれ以上言葉を発することはなかった。

地上では救急車が数台待機している。

西川、井川、林田はそれに乗ってすぐに病院に運ばれた。

「さてと」

とくに大きな怪我のない聖夜と梢はしばし途方に暮れていたが、
聖夜は恥ずかしそうに口を開く。
「帰るか」

8月7日

病院

「失礼しまーす」

聖夜は梢と共にお見舞いに来ている。

「あ、皆さん同じ部屋なんですね」

4人部屋には窓側に西川と空きベッド、入り口側に林田と井川がいる。

そんな光景を見て梢は気まずそうに微笑んでみた。

「事件が続いていたからな、空気がないんだよ」

西川は少しむくれながら言う。

患者用の病院服は夏ということもあって薄く、歳のわりに若く見える西川が着たので聖夜の視線は一瞬、胸で止まった。

それを梢は見逃さない。

「……ぬっ!？」

爪先から電気が流れた。

梢はヒールの踵で聖夜の足を踏みつけている。

「いやっ……ちがつ……!」

井川は冷や汗を流しながらその光景を視界に入れまいと壁を凝視している。

その向かいの林田はニヤニヤと2人のやり取りを眺めている。

「いちやつくなら余所でやれよー」

たまらず西川は茶々を入れる。

「そうしますー」

梢は聖夜の腕を掴んで外に連れ出そうとする。

「あ、これお見舞いっす！」

果物が入ったバスケットを残し、聖夜は連行された。

「……死ぬなよ、小口」

井川は閉じられたドアに向かって敬礼した。

9月2日

神奈川県警

「退院おめでとうございます、井川も」

「ああ、ありがとう」

署長室の黒椅子に座るのは無事に退院した西川。

机を挟んで気をつけているのは同じく無事に退院した井川と、

聖夜。

「あの、今日はどうして……？」

呼ばれて理由の分からない井川は西川に尋ねる。

「何だ、聞いてないのか？ お前らは昇進だよ」

さらっと口にする西川。

ちなみにこの人は署長になつたわけで昇任だ。

「昇進……？」

「そりゃーあんな事件のど真ん中で働いてくれたんだ。通常は昇進試験を受けるんだが今回は特例だ……はい、これ」

いまいち現実として受け止め切れていない2人に西川は新しい制服を手渡す。

両袖には銀色の斜め一本線の袖章が入っている。

「あ、ああありがとうございます」

2人はしどろもどろになりながらもそれを丁寧に受け取った。

「以上、行っていいわよ」

笑顔で言った西川は引き出しから書類を取り出して仕事を始めてしまう。

「失礼します」

2人は敬礼してから静かに出て行った。

「昇進かー、とりあえず飲みにも行くか！」

井川はやつと実感が湧いてきたのか、声のトーンが上がっていく。
「いいけどその前に、報告だ」

2人は小さい花束を持って墓参りに来た。

目の前には年季が入ってきた墓石と、その両脇に真新しい2つの墓石。

「伊東、井ノ部、河浦……」

2人はしゃがんで手を合わせた。

……………。

胸の中でそれぞれにどんな言葉をかけたのか、どんな会話を交わしたのか、それはきつと本人にしか分からない。

それでも2人は、意識の中で5人が笑い合っている景色が見えたはずだ。

7月8日

「あーあ、結局皆死んじゃったのか、詰まんないな」

都内某所、取り壊しが決まっていながら工事が止まったままの廃ビル。

もちろん電気もガスも水道も止まっている。
しかしその5階には1人の住人がいた。

「せっかく増やした熊もほとんどいなくなっちゃったし……このぶんじゃアメリカの施設ももう使えないか」

地べたにあぐらをかく男の目の前にはノートパソコンが1台。

画面は4分割されているが、どれも東京タワーの外か内部の映像だ。

「まー、俺の血を分けた熊達だ。いくらでもまた増やせるか」

長めの黒髪をグレーのパーカーのフードで隠し、男はパソコンを持つてどこかへ歩いていく。

「親父がくたばったから結果オーライだな……でも、家出はもう少し続けるかな」

そよ風の吹く夜道を歩く男。

その名前は、熊田拓哉

> i 1 7 5 0 9 — 1 3 1 3 <

絵：夢見月空音

作者：有北真那

＊＊匹目 裏話 ・闇へ続く鬼ごっこ・（後書き）

長い間のご愛読、本当にありがとうございました！

この回を持ちまして

「クマさんと鬼ごっこ」

は無事に完結とさせていただきます！

若干続きが書けそうに終わらせたのは打ち切りでは無く、当初の予定通りですので悪しからず。

挿絵を描いていたのですが、今回はお蔵入り（<|>）

無駄に人が多いのと描写が少なかったのが原因です乙

代わりに載せさせてもらった最後の1枚は初めてPCで描いた作品です！

半年以上かかって完成したこの作品。

読み返してみれば誤字脱字のオンパレード。

書き方の荒さ。

などなど、いかに実力が無かったか痛感します（笑）

それに気付けただけこの作品と共に成長できたのかな？

って思いたい

今回学んだこと、皆さんから教えていただいたことを活かし、次回作に現在取り組んでいるところです！

どうかこれからもよろしくお願いしますm(_____)m

f r o m 真那

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1432m/>

クマさんと鬼ごっこ

2011年2月20日23時40分発行